地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら DePOLA

14

'98春夏号

特集 田舎でセカンドライフ

中高年者のふるさと移住と地域の取り組み

右／趣味の蘭栽培を生かして五色洋ランセンター施設長に。三浦さん夫妻（淡路島五色町）
左／愛馬ユキと坂本さん（岩手県沢内村）

特集（田舎でセカンドライフ 中高年者のふるさと移住と地域の取り組み）に寄せて

日本人の平均寿命は、男性が77・01歳、女性が83・59歳（96年・厚生省）。女性は12年連続世界一、男女とも世界最高水準の長寿を維持している。

100歳以上の長寿者も、前年より約1000人増えて、女性が6921人、男性が1570人となり、最高齢者は女性が113歳、男性が110歳となっている。

現在のように60歳で定年退職しても、あと20年近い長い人生がある。それを〝余生〟〝老後〟と考えてテレビなど見ながらのんびり生きていくのか、職業生活からのリタイアを〝新しい生活〟の出発点として積極的に生きていくのかで、その後の人生は大きく異なってくる。

最近は、会社は今までのようにいつまでも面倒を見てくれないし、経済や利益優先の社会のひずみも強い。それでも、何とか自立し、地域社会の中で社会的関心を持って暮らしたい、長年望んできた豊かな趣味を実現したいという、後者のタイプが増えてきている。

しかし、長寿世界一でありながら、日本ではなぜこうも長寿社会に対するイメージが暗いのだろう。今回、高齢社会についての意識調査を各種集めてみたのであるが、厚生省や都、市町村が行っているアンケートの設問には「年取った時の不安は」「寝たきりになった時は」「介護をどうするか」「年金生活で充分か」「仕事を続けたいか」といったような事項ばかりが目立ち、第二の人生をめざそうという人々の姿はどこにも反映されていない。

そんなせいか、㈶経済広報センターが設立した「シニアネットワーク」のアンケート調査でも、長寿社会に関するイメージは「明るい」「どちらかといえば明るい社会」と答えた人が32・6％であるのに対して、「暗い」「どちらかといえば暗い社会」と答えた人が62・5％になっている。

今まで、行政や老人問題の専門家などが高齢者を「弱者」「介護の対象」として語りすぎてきたとはいえないだろうか。確かに超高齢社会へ向けて高齢者福祉対策を考える上で重要な点ではあるが、高齢者自身が語る高齢者論や、中高年者が語る老後の生き方等をアンケートしたものはあまりにも少ない。

いずれ人は死を迎えるが、それまでの10年か20年を精一杯自分らしく生きたい、職場や子供の扶養等から解放された今こそ趣味を楽しみたい、自然環境や人情の豊かな地方で暮らしたい等と思っている人達が大勢いることを無視してきたのではないだろうか。

ある保険会社が40～50代の団塊の世代の男性に行った調査では、30％の人が「田舎暮らしをしたい」と答えており、「家庭菜園をしたい」「自然の中で暮らしたい」と答えた人を含めると約半分が地方移住を願望している。

これらの動きを反映して、多くの過疎町村がまちおこしや定住促進対策の一環として、中高年者の移住やUターンを積極的に受け入れるようになってきた。恵まれた住環境を用意されて迎えられた移住者たちは、地元の人々と交流、地域の活性化にも貢献している。

年金で相当程度の収入が保障され、時間が自由に使えるシルバー世代こそ「黄金の時」。社会も私達も高齢者に対する従来のイメージを改めると共に、老後へのビジョンを持ちその夢の実現へ向けて努力したいものである。

本誌では、これらをふまえ「田舎でセカンドライフ」を特集テーマとし、地方へ移住したりUターンした中高年者と、その人達を迎える町村の取り組み等を紹介する。

登場していただいた人々は、みんな輝いていい顔をしていた。都市に比べれば決して便利とはいえないし、農業には厳しさも伴っている。しかし誰も自分達の選択を「よかった」と語り、生き生きと充実した日々を送っている。

町村によっては80代が現役でバリバリ働いており、60代はまだヒヨコ。ヒヨコと「生涯の現役」達が支え、支えられながら築いていく地域にこそ、高齢社会の理想郷があるのではないだろうかとしみじみ感じた取材であった。

「でぽら」編集部

「でぽら」とは――

Depopulated Local Authorities(人口が少ない地域)、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村は1200市町村あり、38%にも達しています。貴重な自然環境と農産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土を伝承してきた農山村の活性化と発展をめざすための交流誌として『でぽら』をお届けいたします。回覧し、多数の方にご高覧いただければ幸いです。

地方と都市を結ぶ
ホットライン・
マガジン

でぽら De POLA

NO.14
●もくじ

特集「田舎でセカンドライフ 中高年者のふるさと移住と地域の取り組み」に寄せて(編集部) 2

■高齢者歓迎のまちから

・島でユートピアを見つけた! 高齢者歓迎[シルバーアルカディア](隠岐・西ノ島町) 4

・"熟年誘致"で町に新しい風(淡路島・五色町) 8

■むらづくりを中高年のパワーで

高齢者は「生涯現役」 Uターン者は"若手"として活躍

・22集落へ毎日給食サービス(山口県東和町) 11

・ふるさとでキャリアを生かして再出発(山口県大島町) 14

・"生命行政"の沢内村に魅せられ、新しい農業と村づくりに夢を託す(岩手県沢内村) 16

●De POLA ESSAY

僻村は文化の発信地/高橋 治(作家・白山麓僻村塾主宰) 18

■田園生活こそ充実の時

・山里に移住し家族の夢を実現 フラワービレッジ・近藤さん一家 20

・家庭菜園のあとは「ふれあい館」で 花と緑の手づくり村「クラインガルデン」(群馬県倉渕村) 21

■福祉施設を核に

・「町はホーム、ホームは町」[ユーシャイン]はUターンの老婦人も受け入れた(広島県総領町) 23

・自然郷・川場村で「安心」の老後を[ベジル尾瀬](群馬県川場村) 26

●過疎のむらから地球が見える①

海峡を渡る風は未来の無限のエネルギー 竜飛ウインドパーク(青森県三厩村) 28

INFORMATION

田舎暮らしのためのU・Iターン情報他 30

お知らせ/編集後記 31

●表紙写真

左上/いまや野菜づくりのプロフェッショナル・西原さん(五色町)
左下/毎日90食の昼食を調理する四姉妹(東和町)
右上/週末にはふるさとに建てたセカンドハウスで、田辺さん夫妻(総領町)
右下/地元の漁師さんと交流しながら釣りを楽しむ(大島町)
(Photo by KEI KOBAYASHI)

▼東京から移住、みかん栽培をする牧さん

島でユートピアを見つけた！
高齢者歓迎「シルバーアルカディア」
●隠岐・西ノ島町（島根県）

高齢者歓迎のまちから

全国に先がけ、高齢者移住を呼びかけた隠岐・西ノ島町「シルバーアルカディア事業」。13世帯、26名の夫婦がやってきて、島の人達の協力を得ながら、〝現役〟として仕事をし、釣りや家庭菜園などの趣味を楽しんでいる。

一方で漁業の町にふさわしく、漁師をめざす若者やファミリーの定住促進事業も成果を上げており、島は活気を取り戻しつつある。

海の見える畑で家庭菜園をする大和さん夫妻。

野良仕事を終えると目の前の海で釣り

横浜市出身の大和英雄さん（60）と幸子さん（53）が西ノ島町浦郷に来て、ちょうど一年になる。

町が新築した一戸建住宅（交流住宅）に住み、そこから二、三分のところに畑を借りて、30種類の野菜づくりをはじめた。

「定年後はどこかの島へ行って農業をやり、自給自足的な暮らしをするのが長年の夢でした。瀬戸内海、長崎、屋久島などあちこち行って見てきました。ここは冬は寒い、風雨の時は海がしけるなどを覚悟していましたが、気温は温暖で、景色も素晴らしい。まさにユートピアです」と夫妻は語る。

60坪ほどある畑は、いろいろの野菜を効率よく栽培するよう盛土する。

訪ねた日は、盛土するための木枠を作っていた。

「畑の隅で木の葉などで堆肥を作っているんです。海辺に打ち寄せる海草類は虫がつかないそうで、素晴らしい堆肥になりますね」と奥さんの幸子さん。

目下はキャベツ、白菜、ネギ、ホウレン草、イチゴなどを作っていて、なかなかの腕前。「農業をはじめるに当っては別府の農家へ研修に行きました。研修手伝いなのに月5万円も支給してくれて、いろいろのことを学びました」

「みなさん、とても親切で、本当に来てよかったと思いますよ」

畑からは美しい海が真近に見える。波静かな入江で、西ノ島町の代表的な漁港の一つ。約10艇が夕方5時頃に漁に出ていき、翌朝早く帰ってくる。

野良仕事を終えると、二人は目の前の海で釣りを楽しむ。小アジなどは干して煮干しに使うのだという。

「釣りの方は素人で、毎日食事を賑わすほどの成果はありませんが、漁業組合へ買いに行けば新鮮な魚介類がいろいろ買えます」と言っていた。

西ノ島町で人生の最も充実した時間を

西ノ島町は隠岐諸島の島前に位置し、蝶が羽を広げたような総面積55・97㎢の島。大山隠岐国立公園に指定され、国賀海岸、摩天崖など、ダイナミックな自然の造形美が観光客に人気があるが、おだやかな入り江と人家、そして目の前にはいつも美しい海を望む普通の風景も素晴らしい。

しかし人口は離島という立地条件から、昭和25年に7463人だったが、平成9年には4152人にまで減少、若年人口の流出で約3割が65歳以上となっている。

漁業、畜産（優良牛の飼育）、観光の基幹産業は順調に発展し活気を呈しているが、それを支えているのはシルバー・パワーだ。長寿者（90歳以上）のクオリティ・オブ・ライフ（生命、生活の質）が国内でも高いレベルにあることから「いきいきと長寿をおくることが可能な町」と位置づけられている。

西ノ島町では、50歳、60歳はまだヒヨコ。都会にいる中高年者に呼びかけて、当町へ来

◀移住希望者が一週間利用できる「体験ハウス」。生活用具のすべてが揃っている。

◀移住してきた家族のための一戸建「交流住宅」。案内してくれた役場の浜梶係長。

て働いたり趣味の生活を楽しんでもらい、同時に高齢者福祉等の充実をはかろうという意図で、平成4年に〝高齢者の桃源郷〟「シルバーアルカディア構想」を策定した。

各地の農村漁村で若者の定住対策を熱心に行っているが、その割には成果が上がっていないという背景もある。

岡田町長は、以前夏祭りに帰郷した男性達が、定年退職したが「今が一番人生の中で幸せだ」「充実している」と語っているのを聞いて、こういう人達に活躍してもらいたいと考えたという。家も建てたし子供の教育も終え、生活は年金で食べていける。いまこそ夫婦健康で趣味や夢のあるセカンドライフを楽しみたい。そんな人たちに向けて「高齢者いらっしゃい」という自治体があってもよいはず。その先進地になろうと考えた。

西ノ島町のシルバーアルカディア構想に国土庁も賛同、「過疎地域にふる里を」推進モデル事業に採択された。それがマスコミに報道されると2000件を越す問い合わせが殺到したというから、反響の大きさが伺える。

平成6年には地元住民の理解も得て、首都圏と近畿圏を中心に説明会を開いた。

西ノ島町へ来訪したり説明会に参加し、近い将来西ノ島町に住みたいという登録者は550名、現在13世帯26名が移住してきた。

町では当初、宅地造成を行い分譲して家を建ててもらう計画であったが、用地の造成や住宅建設に時間がかかることから、急拠計画を変更して空家の借り上げ方式を導入した。

90戸の空家があったが、夏には帰るとか家具や仏壇等があって貸せないという家が多く結局10戸しか獲得できなかったが、これらの家は町が50万円を限度に助成して改修、移住者は家主に家賃（1万5000円～3万円）を直接支払うという方式を取っている。

選択は百パーセント正しかった

大阪枚方市から来たAさん（59）は移住第一号。大阪での説明会に奥さん（51）と参加し、2カ月後に移り住んだ。家の前に充分すぎるほどの畑があり、海にも近い。

「選択は百パーセント正しかった」というAさんの傍らで奥さんも「最初は何でしんどい思いせなあかんのと思ったけど、近所の人が玄関に野菜を置いといてくれたり、ここの恵まれた自然にふれているうちに素晴らしいとここに移ってきたと思うようになりました」と語る。

二人の趣味は海釣り。ご主人は海釣り公園センターに職を得、奥さんはホテルで働きながら、休日は思う存分釣りを楽しんでいる。

子供達は両親の移住に必ずしも賛成せず、病気になったときが心配といっていたが、Aさんは「人間どこにいても死ぬ時は死ぬ。不安を言い出したらきりがない」と子供達を説得したという。

70歳でも現役。島のお年寄りはたくましい

異色は京都市から移住してきた森田昂医師（63）。京都の大学病院の内科医師だったが西ノ島町の美しい自然環境の中で、好きな読書を楽しむと共に、何らかのかたちで島民の地域医療にも役立てればとやってきた。

幸い別府地区に、以前医師が住んでいたが亡くなったため空家になっている家があり、そこを借りた。町の診療所にも近い。

「診療所には若い医師が数年単位でやってきますので、そういう人たちを優先させ、私は休日勤務でお手伝いしています。他に浦郷診療所へ週一回、特養老人ホーム『みゆき荘』の委託医師として週一回出かけています。

京都の大学病院から移住してきた森田医師。

患者はお年寄りが多く、言葉の問題や、我慢強くて痛いなどの訴えをあまりしないお年寄りにとまどいもありましたが、70歳でも現役で働く島の高齢者はたくましく、いろいろ学ぶことがあります。それだけに健康には気をつけて早期治療をと願っています」と語る。もの静かな学者タイプである。

森田医師が来町して2年たつ。町の人達は「とても親身になってくれて頼りになる先生。ずっといてほしい」と言っていた。

奥さんは花作りに熱中して島暮らしを満喫、二人で自転車に乗って島内散策に行くのが楽しみの一つだと語っていた。

なお西ノ島町には、島前町村組合立の総合診療所をはじめ、近代的でアットホームな養護老人ホーム、特別養護老人ホーム（共に50床）も完備、医療・福祉面でも充実している。

父と息子、山村の再生に命をかけて

浦郷港にある観光協会で事務局長をする大

◀観光協会に勤める大浜さん。

◀ログハウス(貸別荘)の内部。

◀海を望む景勝地にある虹団地(分譲地)

浜亮一さん（54）は2年前にUターンしてきた。奥さんや子供は川崎市に残り、大浜さんだけの帰郷。

「83歳になる両親が心配で時々帰っていたのですが、私自身が渋谷の街を歩いていて発作を起こし病院へ運ばれたことがあり、喘息であることが判明しました。喘息は小児のものかと思っていたら中高年になって発病する人も多いんですね。忙しく自分で事業（商社）をしていたのですが、一年かけて整理して島へ戻りました。幸い両親は元気になり、遅ればせながら親孝行しています」

大浜さんの実家は三度地区にある旧家で山林を沢山持っている。しかしいま隠岐島全体が松喰虫にやられて松は枯死、美しい島の風景が消えようとしている。大浜さんの父親は「このままでは死にきれん」といって毎日山へ出かけ枯松を整理し、杉を植林し続けている。もう1000本植えた。亮一さんも立ち上がった。酸性雨にも強い山桜を山や海岸沿いに植えることである。

昨年11月に100本植えた。近所のおばあさん（82）が聞きつけ、自分にも植えさせてほしいといって3本植え「百年後はきれいな花を咲かせるんだろうね」と嬉しそうに語ったという。

大浜さんは毎年100本ずつ10年間植えて「千本桜」にする計画だ。

シルバーアルカディア事業への関心も高く、できれば移住者と地元の人が交流を深めるためにも空家を活用、トイレを水洗にすれば充分対応できると想定している。旅館や釣り宿、民宿などへは、都市の真似ではなく地元で採れたものをおふくろの味で提供すべきだ等のアドバイスも忘れない。

「収入は3分の1に減ってしまいましたが、ここの空気は私に合うようで、喘息も出ず大変健康になりました。家族とは年一、二回しか会いませんが、手紙や電話、FAXでしょっ中連絡をとりあっているので、以前よりコミュニケーションが出来ている感じですよ」

子供が大学を出て独立したら、奥さんも島にやってくることになっている。

人と自然が共生する こだわりの施設

シルバーアルカディア事業の担当、浜梶光則産業建設課係長は、「住宅などの必要な施設は我々が用意するが、過保護、過干渉はしない。何かあったら言ってくださいと言っている」と、役場の対応を語る。問題は、年間200件に及ぶマスコミの取材申し込み。静かな生活をしたいからと来町した人達に迷惑をかけてはと気を使い、頭を悩ますという。

同課担当の前は、企画部門にいて、西ノ島町の総合計画やシルバーアルカディア事業の施設づくりに関ってきた。

主な施設を案内してもらったが、それはどれも、自然と人との共生、使う人への充分すぎるほどの配慮、そして夢やゴージャスな気分を満喫させてくれる本格的な建物だった。

例えば体験ハウス。海を見下す丘に2棟の一戸建住宅があり、移住希望者はここで一週間宿泊し、町の暮らしを体験できる。檜の香がする純日本家屋の広々とした家で、厨房用品から寝具まですべて揃っている。一棟は障害を持つ人が車椅子でそのまま居間に入り、ゆっくりサンルームでくつろげるように設計されたバリアフリーの家。一日光熱費として2000円支払うだけで利用できる。

前述した大和さん夫妻も一週間ここに滞在し、たちまち西ノ島町ファンになってしまった。

本格的木造建築で、内装もデラックス。使う人本位に何もかも揃った贅沢で快適な建物。それは美田地区、海釣り公園センターの丘に建つログハウス（貸別荘）の場合も同様だった。野生のツバキの群生地で、その自然条件を生かして一棟一棟異った個性的な家が建つ。居間から見る海の美しさは格別だった。

大和さんや漁業就労者として移住してきた家族が住んでいる町営住宅（別名「交流住宅」）も本格的な木造一戸建。10棟あり、シルバー関係世帯が2組、漁業関係世帯が3組、それに国際交流で研修にきたアメリカ人の女性（23）が住んでいる。

家賃3万5000円だから、島では決して安いとはいえないが「住宅としては最高だ」と入居者たちは語る。

町内には集合住宅などを中心に町営住宅が200戸もある。しかし中には古くなり改修が必要な住まいもあるため、今後も住宅の整備に力を入れていくという。

宅地分譲はこれから

しかしシルバーアルカディア事業の目玉であった「虹団地」の宅地分譲の方は、いま一つ進展していない。

美田地区の海の見える景勝地で、電気、ガス、上下水道等を整備した宅地（195・5㎡～375・5㎡）が260万円から449万円で購入できる。当初は2年以内に住宅を建設する条件で売り出したが、厳しい世相等を考慮して5年間にした。現在半分が売れ、家の建設もぼちぼちはじまっている。

これらの状況を見ると、都市から山村に移住したいと夢を持つ人は多いが、実際に行動に移す人は少ないことを感じる。

前述した大和さんは「都市の中で会社人間として働いてきた人の多くは、その環境やライフスタイルを変えてまで夢や新しい生活を

求めることをしない。自然や大地の素晴らしさ、地方の人々の魅力など、実はそれほど解っていないんです。若い時からどういう生き方をしてきたか、本当に自分らしく生きたいと思ってきたかの差が、移住にも現れますね」と言い、また浜梶さんは、

「一般にご主人は島の暮らしにロマンを持ち移住したがるのですが、奥さんの反対で挫折するケースがよくあります。女性はどちらかというと知人の多い便利な都市で楽しく老後をと考えるようです」と言っていた。

虹団地前の海岸は、JRのホテルや子供の国公園、ログハウス、フィッシングデッキなどがある町一番のリゾート地。この波緩やかな湾で暮らせたら最高だろうなと思いながら分譲地を後にした。

●西ノ島町役場☎08514（6）0101

文／浅井登美子　写真／小林恵

漁業をめざして53人が来町

巻網船の準備をする若者たち。作業を終えると約10艇が群団を結んで出航する。

西ノ島町の定住促進事業のもう一つの目玉が漁業就労者の募集。同町は漁業の町として活気があり、水揚高は年間50～60億円だが、漁業に従事する若者は少なく、高齢化が進んでいる。そのため5年前、求人誌等に「漁師になりませんか！」と呼びかけた。反響は大きく、その中から現在家族合わせて53名が来町、漁業に従事している。

高卒以上を対象にしているが、大卒も多く、40歳の人もいる。仕事は巻網作業が中心なので、漁師の専門的知識は必要ない。月給制で基本給が20万円、それに漁獲量に応じてプラスされるので、年間500～600万円の実収となる。

住いも町営住宅や漁業組合の社宅が安く提供されるので、奥さんや子供達にも好評だ。

町営二戸建住宅（交流住宅）に住む浅野勝平さん（36）一家を訪ねて見た。

出身地は大阪市。浅野さんは大学を出たあと職場を変えたが、好きなスキューバーダイビングだけは続けてきた。奥さんの佳子さんもダイビングをやる。

「主人が西ノ島町で漁業で働くと決めた時、好きな海で働けるならと賛成しました。子供達に父親の働く姿を見てもらいたい、そして自然の中でたくましくのびやかに育ってほしいと思います」と頼もしい。

子供は晃介君(小2)、真季子ちゃん(5歳、4月から一年生)。隣の家にも同じような漁業移住の家族がいて子供は3人。休日には町の子供も遊びにやってきて賑やかになる。

漁には、巻網船、魚影探知船、運搬船など約10艇50人が群団を組んで、夕方港を出航していく。その前に巻網船に乗り込む浅野さんらは、昨日の網を巻き戻し新しい網に変える作業をする。20数人が力いっぱい引っぱる体力のいる作業だ。出航後は、船の中で夕食をし仮眠をとりながら漁に備える。昨夜はサバが大漁だったそうで、早め（朝5時）の帰港となった。獲った魚は海上で運搬船に引き渡し、魚は境港の市場へ直送される。

「私は海に慣れていましたので大丈夫ですが、最初は船酔いする人が続出します。それにしても最近の船は最新機器が完備しており、魚のいる場所を探知し、一網打尽に捕獲してしまう。魚の泳ぐ姿を見るのが好きでダイビングをしてきたので、複雑な気持ちになります。いずれ稚魚の栽培や魚礁の設置などの栽培漁業の方を学んでいきたいと思っています」と浅野さんは語る。また佳子さんは、

「ここは冬は想像していたより暖かく暮らしやすく、町営住宅にも満足しています。ただ、思ったより魚を自由に買う場所がなく、野菜などが高い。船で持ってくるので割高になるのは仕方ないかもしれません。たまに大和さんからいただく野菜は大喜び、私もどこか借りて家庭菜園しようかな」

窓辺には近所の人からもらったという柿が干してあり、台所には小アジの干ものも。玄関脇にはダイビングスーツがあったが、もぐりは漁業組合員でないと許可されず、漁師がアワビやウニを獲る場合も期間や時間を厳しく制限しているという。シルバー移住者の中には漁船を購入（一艇200万円から）して漁師をめざしている人もいるようだ。

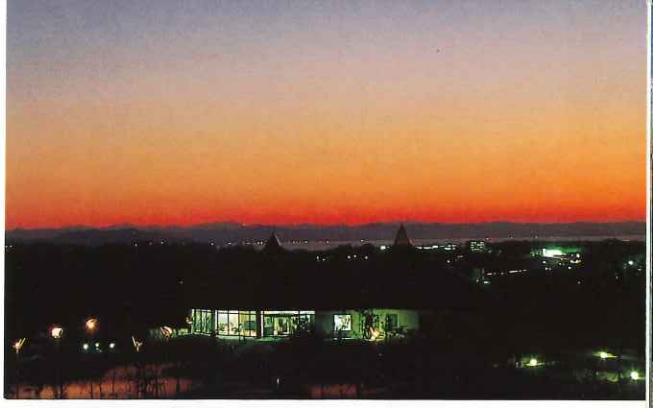
●浦郷漁業協同組合

☎08514（6）0201

大阪から移住してきた浅野さん一家

過疎のハンディを逆手に取って安い土地を自治体が買い上げ、住環境を整備。定住化政策に乗りだした町、淡路島・兵庫県津名郡五色町。セカンドライフにこの土地を選んで移り住んできた人々は多種多彩。地域には新しい風が吹き、人口減の続いた町は、平成3年を境に人口増加へと転じ、今でもそれが続いている。

▼洋ランセンターで、三浦さん夫妻。



▲上／夕陽に映える瀬戸内風景。下／売行き好評だった神陽台団地は、いま建設ラッシュ。

高齢者歓迎のまちから

〝熟年誘致〟で町に新しい風

淡路島・五色町（兵庫県）

夢見ていたのはこんな暮らしだった

大きな夕焼けが瀬戸内の海を染めていた。淡路島の西岸、五色町の小高い丘に立つと、夕陽に映える瀬戸内の島々が見渡せる。

三浦喬俊さん（56）が移住の下見に初めてこの町を訪れた時、強烈に心に焼きついたのがこの丘からの眺めだった。海の見えるところで暮らしたい――ずっとそんな夢を持ち続けてきた三浦さん夫妻にとって、偶然迷い込んでしまったこの公園からの眺めは、移住を決意させるには充分な素晴らしさだった。

迷った公園で受付の人が電話してくれたのが、五色町役場地域開発課の山口一紀課長だった。山口課長は五色町の定住化促進政策の、いわば仕掛人。夫妻は夕暮れの町を役場に向かい移住の相談をもちかけた。

元はと言えば大手機械メーカーの花形エンジニアだった人。25年勤務したその会社を10年前に辞め、長年の夢だった洋ラン栽培を滋賀県蒲生町で始めた。その園芸会社がやっと軌道に乗った頃、ふと目にしたテレビで五色町が売り出している定住化促進用団地のPRを見た。海と緑に囲まれた町――という宣伝文句に心が動いた。

役場の山口課長から思いもよらない提案が出され、話は一足飛びに進展した。

町では昭和45年に過疎地域の指定を受けて以来続く人口減少に、歯止めをかけようと、さまざまな試行錯誤の末、宅地分譲などによる定住化政策を打ち出した。それと併せて地域住民の出会いとやすらぎの場、対外的な交流の拠点にと「ウェルネスパーク五色」を建設。

定住促進政策の仕掛人、山口課長。

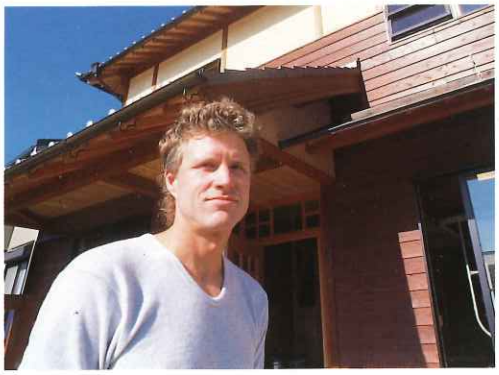
その施設の一部である温室の運営管理責任者を丁度探していたところだった。翌年のオープンに備え、ぜひ協力してくれないか、との申し出に一も二もなく応じた。海の見える町で洋ランの栽培ができる。この上ない嬉しい話だったと三浦さんは述懐する。

しかし肝心の住まいとなる町の分譲地神陽台団地は思うようにいかなかった。

「団地の場所からは海が見えないのです。老後の定住ということでせっかく住むのですから、やっぱり海の見える家が欲しい。今はとり合えず震災の復興住宅に入れてもらっています。まあ、ゆっくり探しますよ」

平成8年12月に滋賀から移り住み、翌年4月のオープンからずっと、五色洋ランセンターで施設長として働いている。

「観光温室としては小規模ですが、洋ランの植え替え方法などもどんどん公開し、独自性



◀和洋折衷の楽しい家を建設中のアメリカ人大工、スタン・ラッセルさん。

◀神戸から移住した白石さん。囲碁を通じて地元の人たちとはすっかり仲間同志だ。

のある栽培観光温室をめざします」

三浦さんは説明をしながら面白いものを見せてくれた。この五色町の産品である淡路瓦を使った美しい花瓶だ。三浦さんのアイデアで町の瓦工場で焼いてもらったというその花瓶は、この洋ランセンターで販売され、温室を訪れる人たちになかなか好評だという。瓦の素材で花瓶を作るという思いがけない発想に、瓦職人の人たちも大いに触発されたに違いない。

「僕らのように企業戦士として組織の中で長年働いてきたような者にとっても、こういうところでその経験を前向きに活かせることって案外沢山あるんです。そういう意味でも今の仕事は面白いですね」

と三浦さんはエンジニア時代のチャレンジ精神が活かせる今の職場に満足した様子で話す。

妻の敏子さんは歯科衛生士として働くかたわら、パン作りやフラワーデザインを楽しんでいる。長男はカリフォルニアの大学に留学中。二人のセカンドライフは快調にスタートしたところだ。

国道もない、鉄道もない ないないづくしの町だからこそ

五色町が10年前から始めた宅地分譲は、鮎の郷、さかえ、神陽台の三団地で、これまでに522区画を売り出し、ほとんどが売れた。

町では過疎化で増えていく遊休地を買い取り、宅地に造成して分譲。3・3平方㍍当り1・5万円前後という割安感が受けて、売れゆきは好調だったという。三団地の入居者はすでに332世帯計1067人と、町人口の一割に近い数となった。これに気をよくして平成10年秋には、約80区画の第二神陽台団地も売り出される予定だ。

入居者の半数以上は島外からで、セカンドライフを緑豊かな町でのんびり送りたいという都会脱出組が中心となっている。

五色町はこの定住促進事業により、過疎指定を受けた昭和45年以来続いていた人口減が、平成7年度国勢調査で初めて234名の人口増へ回復するという快挙を遂げた。

山口課長はその辺りの事情について、

「昭和31年の町村合併当時に15、458人だった人口が、平成2年には10、232人までに激減しました。何しろ島内1市10町で唯一本州四国高速道路の通らない町で、国道も鉄道も主要な国営、県営施設など何もない町でして、過疎指定も島内で唯一、真先に受けました。それで発想を転じて、過疎地が故の遊休地の利用を考えようということになった訳です。用地の取得造成から企業誘致、そして定住化の宅地開発などが功を奏して、平成7年にやっと人口増の実現となりました」

この定住促進事業は国土庁の国庫補助支援を受け、コスト低減による、より安価な宅地価格での提供をめざしている。具体的には5年分の年収程度でマイホーム取得を実現させようというものだ。

ゆとりのマイホームは 家庭菜園つき

町が売り出した団地のひとつ神陽台を歩いてみた。団地の建つ鮎原地区は淡路島のヘソといわれるほどの島の中心部にあり、本州四国連絡道へのアクセスポイントとなる津名・一宮インターまで、クルマで約20分と便利だ。

周辺には保育園や診療所、小中学校、スーパーなどひと通りの施設が揃っている。一区画の平均面積は250平方㍍程あり、建設中の家はどれも立派な豪邸といった趣だ。

建設中の一軒に、アメリカ人の大工さんがコツコツと一人で作業をしているところに出くわした。スタン・ラッセルさんという一級建築士で、アメリカンスタイルと和風を折り混ぜたユニークな家を作っていた。団地の中にはヨーロッパ風、純和風など個性溢れる家が点在、やがて楽しい町並みが生まれるであろう。

神陽台から少し離れたさかえ団地は85区画が売り出され、ほとんどの入居が終わっている。陽当りのいい庭先に花が咲き、家々の垣根越しに落着いた暮らしぶりが窺える。

この団地の入居者第一号西原只光さん(64)一家は大阪枚方市から、4年前に夫妻と息子さんとで移住してきた。大阪で会社を経営していたが、今は娘婿に経営を任せ、この五色町で悠々自適の生活を送っている。目下の楽しみは町から分譲地購入者に無償貸付された家庭菜園での野菜づくり。畑には玉ねぎ、菜っ葉、大根などが青々と元気よく育っている。その栽培も本格的で、大根だけでもコーシン大根義経、青首、スウェーデン原種のルタパカなど7種類もの品種を生育中だ。

「近くの牧場から牛の堆肥をもらってきて畑に入れてるさかい、どれもものすごく元気で

▼野菜栽培のプロともいえる西原さん夫妻。

◀町の陶芸教室で指導に当たる富田さん。土をこねる作業はリハビリにも最適とか。

◀右／特養ホーム、左／老人健康センター。

すわ。あんまりよく育ちすぎて、ご近所や知人に分けても食べきれん程です。こちらへ来てから野菜は全く買っていませんわ。もちろん農薬などは一切使いません」

5LDKの住まいには奥さん手づくりの武者人形やぬいぐるみなどが美しく飾られている。ここに移り住んだ大きな理由は子供や孫たちに故郷を作ってあげたかったから。本当の田舎の素晴らしさを体験させたかったからだという。嫁いだ娘さんが孫を連れて遊びに来るのが、夫妻の何よりの楽しみだ。

頼もしい医療福祉の充実

同じさかえ団地に住む白石静克さん（62）は、昨年7月に芦屋市から夫妻で移住してきた。約40年のサラリーマン生活を終え、今は経営コンサルタントとして時々阪神方面へ出向いていくという生活だ。マンション住まいの長かった白石さんにとって、老後を土地つきの家で暮らすというのは長年の夢だった。

知人の紹介でこの町の売り出している分譲宅地のことを知り興味を持った。ゆったりとした宅地が割安で購入できることも大きな魅力だったが、一時体調を崩したこともあってこの町の医療福祉の充実ぶりが何とも頼もしく感じられたという。

医療福祉は五色町の掲げる活性化戦略の中の主要な柱の一つで、安心して暮らせる快適環境の確保という視点から、町も取り組みに力を入れている。町には県民健康村や健康福祉総合センター、地域福祉センターなどの施設が整い、デイケアサービス、在宅看護サービス、グループホームの充実など、老人福祉医療への対応は実にきめ細やかだ。

また医療を含めた地域情報化対策として、双方向機能を備えたCATV総合情報ネットワークシステムも整備されている。これにより多チャンネルのテレビ番組を楽しめる他、CATVの回線を使った有線放送や在宅医療支援システム、緊急通報システムなどを利用することができる。

五色町ではこの他にも全国に先駆けてICカードシステムを導入。阪神・淡路大震災での教訓を生かして災害時にも役立つ多目的カードとして広く利用されている。このICカードには住民の保健医療福祉情報が記録されるため、病院での受診や救命作業に、また住民票等の自動交付にと、幅広く便利に使うことができ好評だ。

さて、白石さんはこの日、神戸の芦屋から遊びにきた息子さん一家と、町の保養施設ウェルネスパーク五色の中にある五色温泉「ゆ～ゆ～ファイブ」にやってきた。ここはミネラル風呂、エステ湯、ジェットバス、露天風呂など各種浴槽を備えた天然温泉で、住民に人気のヘルシーリゾート施設。この温泉に入るのが楽しみで息子さん一家は時々こうして神戸からやってくるという。

翌日、白石さんの家には大勢の囲碁仲間が集まった。この地区の世話人である滝さん、元海運業の武田さん、農業の植村さん、元教員の斎藤さんと船越さんだ。囲碁が5段の白石さんを囲んで週に一度こうして勉強会と称して会合を楽しんでいる。ほとんどが地元の人たちで、それぞれが人生のプロフェッショナル。移り住んできた人たちとも心を開き合い、交流の輪が広がっている。どちらにとっても心地良い刺激が、互いの暮らしを一層楽しいものにしているに違いない。

暮らしに根ざしたボランティア精神を

診療所で会った富田文二さん（76）は、毎週一度ここのデイサービスの日に、患者さんにボランティアで陶芸を教えている。

長年横浜で食料品店を営んできた。子供たち4人が神戸に在住していることもあり、老後は子供たちの近くでと、何となく考えていた。息子さんが神戸新聞でこの町の定住政策の記事を見つけ、まず下見に。

両親の健康が一番心配だった息子さんを感激させたのが、この町の医療福祉への取り組みだった。行き届いたケアシステムと環境の素晴らしさは、文句のつけようがなかった。

5年前に鮎の郷の分譲を買い、入居第一号に。町内会長を2期勤め、家庭菜園のリーダーとしても活躍。五色町のカルチャーセンターともいえる老人大学で陶芸を学び、今度は「お返しに」という気持ちで、デイサービスの患者さんに教えている。

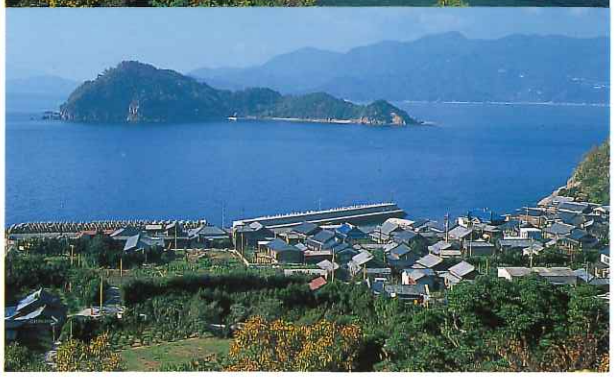
「ここではそんなことが本当に自然なんです。ボランティア精神が根づいているというのか、健康な人が弱者に手を貸そうという姿勢が常にありますね。診療所への患者さんの送り迎えのボランティアも、現在25人位いますし、特別養護老人ホームのシーツの洗濯や掃除のボランティアも沢山いるんですよ」

富田さんも診療所への患者さんの送り迎えのボランティアを、週に一度ずつ欠かさない。

「ここは年寄りが恵まれ過ぎてますよ。大事にし過ぎ。みんなエバッてんだから（笑）。でもね年寄りがエバれるというのは幸せなこと。本当の意味でいい町だってことですよね」

さまざまな人が移り住んできたことで、町は活気づき、また移住者にとっても屈託なく懐を開いてくれる地元の人たちの心意気が、何よりも嬉しい。弱者に優しい町は、島外からやってくる移住者にも訪問者にも、暖かく優しかった。

文／金子淑子　写真／小林 恵



▶上／大島町から大島大橋を望む。下／東和町と瀬戸内海
◀毎日給食を調理する四姉妹。左から長女、次女、米子さん、三女。

むらづくりを中高年のパワーで
（瀬戸内海　東和町・大島町）

高齢者は「生涯現役」

Uターン者は〝若手〟として活躍

22集落へ毎日給食サービス

東和町（山口県）

山口県東南部の瀬戸内海に浮かぶ屋代島。その先端に位置する東和町は49％が65歳以上という日本一高齢化の町。しかし暗いイメージはどこにもなく、町の空気は明るく活気に満ちている。ここでは高齢者は「生涯現役」、農業や漁業に打ち込み、元気な老人が弱い人のお世話をする。変わらぬ人々の営みとふれあい。そんな町にひかれて都会から移住したりUターンする人達は〝若手〟として活躍している。

東和町の北部、屋代島の玄関口に当たる大島町。ここでも高齢者を支え、支えられながら島の暮らしを満喫している移住者や帰郷シルバーがいた。

「生涯現役」のユートピアのまちからの報告。

山口県大島郡4町から成る屋代島は瀬戸内海では3番目に大きい島で、東和町はその東南端、総面積38・74㎢。ほとんどが山地で、切り立った山々が海岸線に迫り、海岸沿いに22の集落が点在している。

人口は5729人、世帯数2909だが、65歳以上が2702人で、高齢化率は48・91％（平成9年度）、日本一である。

高齢者のうち、要援護を含む独り暮らし老人が754人、在宅寝たきり老人が59人。80歳以上の老夫婦家庭も65世帯ある。

町では特養ホーム「白寿苑」（80床）を中心に、入所、デイサービス、ショートステイ等を実施しているが、できるだけ住み慣れた地域で元気に暮らしてほしいと、平成3年より「毎日給食」サービスをはじめた。

調理を担当するのは、町内の仕出し業務を担っている民宿山本。各地区への配達は社協が行い、利用者宅への配達は、地区ごとの配食ボランティアが行っている。

当初は利用者負担金一食400円で36食からスタートしたが、現在は町の助成（国庫補助事業）で半額以下の300円となり、毎日昼食90食を配達している。

給食サービスにより、昼食の欠食がなくなり、健康になった、孤独感を感じないなどの効果があり（山口県立大学家政学部調査）、高齢者にとって「食」がいかに大切かが伺える。

4姉妹とその家族が調理に腕をふって

この給食サービスで、当初から調理を請負っている民宿山本では、山本米子さん（50）を中心に、米子さんの母親や姉妹が協力して

右／早朝から90食の昼食を作る「やまもと」の姉妹たち。左／午前9時、社協の桝本さんが受取りに来た。

調理が行われている。

賛同して当初から関ってきた亥川鶴枝さん（80）は、104歳になる母親の介護で休職中、米子さんの母親・朝枝さん（84）は自転車で転倒、ケガの治療中だ。

調理は、昨年7月に新規オープンした「瀬戸内荘やまもと」で行われている。

取材に行った日は北九州から米子さんの姉・英子さん（53）も手伝いに来ていて、4人の姉妹が協力しあう。米子さんは末っ子の四女。

調理は早朝4時すぎからはじまり、詰め合わせが終わるのは7時過ぎ。調理場の後片付けと、引き上げた食器洗い担当の長女井原民子さん（63）が出勤してきて、一段落したあと、母親の朝枝さんを囲んで4姉妹そろって朝食となった。

メニューづくりの苦労は、同じものになりがちな素材をお年寄り好みに工夫することだと米子さんは言う。月に2回位は、ちらし寿し、栗ご飯、お正月にはおせち料理もつくる。人気は「芋入りはぶ茶粥」で、お礼の手紙が入ってくることもあるという。

9時、社協の車が取りにきた。老人クラブ事務局、配食サービスを担当している桝本敬三さん（38）は、大阪から3年前にUターン、親元の近くに奥さんと子供3人で暮らしている。個人宅に配食もしながら、毎日2時間かけて各集落の配色ボランティアに届けて回る。

「瀬戸内荘やまもと」の管理人は、米子さんの姉に当る網本健次さん（54）イワヨさん夫妻。Uターン組みで、昨年5月に帰ってくるまでは光市でお好み焼屋を営んでいた。

健次さんは10時頃から、「やまもと」のある佐連地区と沖家室島方面へ保温ジャーに入れた給食を配達に出かける。沖家室島は最近になって橋が出来たが、過疎の中の過疎の島で現在8人に配食している。

一声かけて元気であることを確かめて空のジャーを受け取るが、畑に出て留守の家も多い。いつも駄賃にお菓子を持たせてくれるお年寄りもいる。

配食を終えた健次さんにとって、潮のいい日に、車に積んである釣り竿をちょっと出すのが楽しみだという。

米子さんも朝食後は11軒へ配食に出かけていく。配食しながら、お年寄りに頼まれた買物を届けたり、話を聞いたり、様子を民生委員に伝えるなど、ホームヘルパー的な役割も担っている。

6年間、一日も欠かさず給食をつくり続けてきた米子さんだが、なかにはしばらく家へ連れてきて面倒を見てあげたいと思うお年寄りもいる。小さな老人ホーム、宅老所みたいな家をつくれないかと看護婦経験のある親友と検討中だ。

なお、民子さんのご主人は漁師なので「やまもと」では新鮮な魚料理や家庭料理をたっぷり味わせてくれる。家族みんなが協力してテキパキ働く姿も間近かに見えて感動的な宿であった。

網本さんは佐連、沖家室島方面へ配給へ（左）。社協で働く桝本さんは3年前に家族とUターン。

▼美しい海は魚の宝庫、海岸沿いには海洋レジャー施設も多い。

海の見えるみかん畑で園芸農業。東京からきた牧さんの夢だった。

光る海、太陽の恵みを受けて みかんづくりに挑戦

東京でコンサルタント会社に勤めていた牧英男さん（54）は、まだ体力のあるうちに農業をやってみたいと50歳を節目に農業のできる場所を求めて大分や広島を歩きまわった。

できれば果樹か園芸に挑戦したいと適地を求めたがなかなか条件に合う場所に出会えなかった。その延長で訪ねたのが東和町経済観光課だった。案内されたみかん畑は島の先端の南西斜面、農作業用の錆びたモノレールが樹木を縫うように急斜面の段々畑にのびていた。60アールの畑は温州みかんと伊予かんが植えられていたが、持ち主が亡くなって放置され荒れ始めていた。

牧さんは、急峻な畑の中ほどまで登って振り返って眺めた光景「光る海、蒼い小島」の眼の前に広がる風景が気に入って、迷うことなく借りることを決めたという。

個人的に少しコンサルタントの仕事をしながら単身移住を決めた牧さんは、一年間農業改良普及センターに通いながらの実践を始めた。農業に憧れてはいたものの技術的なことは何も経験がない。農協の技術指導も受けたが、いちばん勉強になったのは、この地域のみかん農家の大先輩のアドバイスだった。この3年間にモノレールを2本増設し、さらに2カ所のみかん畑を借り受け、１００アールのオーナーになった。

20kgのみかん箱や肥料袋を抱える急斜面の労働は、鉛筆しか持ったことのない牧さんにとって大変だったが、次第に山仕事の身体に鍛えられていった。

もっとも大変な作業は夏のスプリンクラーで、風の止んだ日などは体力がいつまで続くか考えてしまうが「太陽のおかげです」と語る。

この斜面のみかんが美味しいのは、3つの太陽があるからだと牧さんは言う。大空のあの太陽と、海に反射する太陽、斜面の土に反射する太陽。「実るのは木の力のおかげで、私の上司は太陽です」と謙虚だ。

秋の収穫には東京から奥さんが応援に来るそうで、昨年は10トンの収穫があった。7割を農協に出荷、3割を東京の知人に直販している。

「一つ一つ鋏でもぎとる、その実の重さが、これがお金だということを実感します。収穫する時の喜びは格別で、農業の魅力を感じますね」と牧さんは語っていた。

なお東和町農協・柑橘技術課では「ふるさとの青空の下で、夢を育てませんか！」と、みかんや野菜、花づくり等の農業就業者を募集している。定年退職者でもＯＫで、借地料は一反（10アール）1万円で、6反から。詳しくは農協「かえるかい」係へ。

「自立と互助の精神で」

2人に一人が高齢者の東和町では「自立と互助の精神」に満ちあふれている。社協会長の大沼省吾さんが「60、70は鼻たれ扱いを実感した」というように、タクシーの運転手島本さんは82歳でバリバリの現役。80歳以上で漁に出たり農業（みかん栽培）をするのは当たり前になっている。

町では「長寿日本一」の名に恥じないよう高齢者福祉施策を重要課題にしているが、地域住民だけでは限界があるし、お年寄りの中にはサービスを受けることに遠慮する気質もある。

例えば給食サービス。町では今後昼食だけではなく夕食も配食することを検討しているが、年金で細々暮らしている高齢者にとっては費用が気になる。そのため、町を出ている子供達に一部を負担してもらうことも今後の課題だ。

さらに、平成7年に、国や県の支援により、東和町を含む大島4町をモデル居住圏として、各種の在宅福祉サービスを重点的に整備する「高齢者モデル居住圏構想」も策定された。

この構想では高齢者の福祉サービスを広域的にネットワークしていくと共に、若い人が町に定住するようリゾート地やスポーツ施設の整備も行っていくことになっている。

いずれにしても、恵まれた自然環境と温暖な気候の中で、お年寄りが生き生きと働いている姿に、私たちは逆にはげまされたのであった。

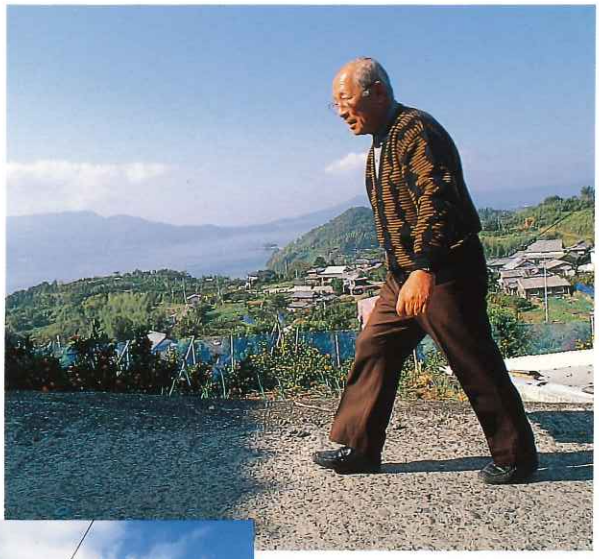
●東和町役場　☎０８２０７（８）１１１０

写真・文／小林 恵

むらづくりを中高年のパワーで

ふるさとでキャリアを生かして再出発

大島町（山口県）



東京からUターンした西村さん。午前中は給食を配りに町内へ。夜はミニコミ誌づくりに机に向かう（自宅で）。

西村さん発行の「ちょうめいだより」

老人クラブ会長として超多忙

この日西村幸人さん（69）は、午前中早めに老人福祉センター「ほのぼの苑」へ出かけ、同所で作った昼食を持って町内へ配達に出かけた。独り暮らし老人を中心に月数回270食分を作り、婦人会、老人クラブ、ボランティアが配給する。

「私は配食係ではないんですが、老人クラブの会長をしているので、何かあると手伝うことになります」

出来たての温い弁当は保温ケースに入れられ、車に積んで町内4地区へ。温州みかんの産地で有名な大島町だけに、道路脇きにはたわわに実をつけたみかん畑が広がる。

「これでも昔に比べると大変減ってしまいました。私の家もみかん農家で、70アール、600本を栽培していたんですが、平成3年の台風であらかたやられてしまい、いまは近くに住む弟妹に助けられて20アール、200本を栽培しています。でも価格が安くて農家は大変です」

西村さんは山口大学を出て県内の小学校で2年ほど教師をしたあと上京、大田区立池上第二小学校等で教鞭をとったあと、都教職員組合、大田区社会教育委員会、国分寺市社会教育委員会主事等を経て、昭和63年に定年退職した。退職後は実家の大島町横見に帰郷するつもりでいたが、帰郷した平成元年までには両親は亡くなっていた。

奥さんのしげ子さん（66）も山口出身の教師。ご主人に合わせて3年早く退職、東京には結婚した娘さん家族がいる。

「地元のお役に立ちたいと老人クラブを手伝い出したところたちまち会長にされてしまって。その時行事のある際には〝お知らせ〟で発行していたものに、もう少し情報を加えて新聞風にして発行してみたところ好評で、以来『ちょうめいだより』として定期刊行することになりました」

『ちょうめいだより』はA4判手書き8～10頁の新聞で、横見地区を中心にした地域の出来事、大島町の主な話題や施策、行事ガイドなど、きめ細かい情報を満載している。中に、地域のことをクイズ形式で紹介したり、子供達に関する記事が多いのは、いかにも東京で教育関係の仕事をしてきた西村さんらしい。

原則として月一回発行、横見地区の100世帯をはじめ東京、大阪にいる横見地区出身者や役所、他地区の希望者など、350部を印刷して発送している。購読料も送料もないが、大阪や東京の人が年一回程度お金を送ってくれるので、何とかやっていけると西村さん。

とは言っても新聞作りで自室の机に向うのは夜になってから。日中は会合だの行事だのが多くて、畑仕事もゆっくり出来ないほど。

「老人クラブというのはクセモノでしてね、会長になると町のこと、地域のことには何でもかんでも出てこいと言われる。一銭にもな

老人福祉センター。奥に見えるのは大島町文化センター。

らず役職ばかり増えます。青年会などがなくなり人口も減っているので、老人達が地域づくりの中核なんです」

公職をリタイアしてゆっくり一つのことをやりたいと望む西村さんだが、まだ当分は無理そうだ。

24時間介護サービスを実施

大島町（人口7860人）は瀬戸内海で3番目に大きい屋代島・大島郡4町の玄関口にあり、昭和51年7月に対岸の大畠町との間に大島大橋が開通して以来岩国市等への通勤圏となった。とは言っても実際に通勤者が急増したのは平成6年に橋が無料になってから（それまでは片道1020㍍の橋に640円支払った）。町では宅地分譲や町営住宅の建設等を行ない、人口は少しずつだが増加しはじめている。

しかし高齢化率は39・1％と高く、西村さんの住む横見地区は97世帯、232人のうち独り暮らしが30人、高齢夫婦世帯が15戸で、高齢化率はさらに進んでいる。

「三方を小高い山に囲まれ、南側に輝やく瀬戸内海、小島の向うに室津半島を望む、まさに風光明媚な地区なのに」と西村さん。

老人クラブでは、高齢者が安心して現役で働けるようにと会員の任意で団体障害保険に加入した。ケガをした時費用が出るというので、加入者に人気。最近は50、60歳の人のケガが多いという。

一方町では、中国地方では初めて国の補助を受けて96年より「24時間介護サービス」を行っている。現在20人を対象に、夜中を含めて巡回し、食事や身のまわりの世話に当たっているが、今後は訪問看護婦も行動を共にする福祉と医療の同時サービスを実施していく予定で、デイサービス事業の360日化（土日曜日も実施）も検討している。

大島郡4町は東和町をトップに高齢化率は高いが、高齢者福祉対策への取り組みも早く熱心である。そして何よりも高齢者が町づくりの核となって現役で頑張っているのが凄い。西村さんの日報を見ると、会合から地域の清掃、行事の準備、片付けなど、予定のない日は一月に一日もないほどビッシリ埋まっていた。

フランス料理の味を故郷へ

大島町の新たな芸術・文化の拠点として開設された文化センター。そこに併設されたレストラン「アザレア」がなかなかの評判で、柳井市あたりからも橋を渡って客がやってくるようになった。

経営するのは大島町出身でフランス料理38年間の実績を持つシェフ吉田英二郎さん(58)。吉田さんは大阪の一流ホテルで21年間勤めたあと、外食レストランから管理職にと声がかかり移ることを決意していた。そんな時、大島町から、文化センターのレストランをやってみないかという話が舞い込んできた。

あと2年間働いて、60歳になったら島に帰り小さな喫茶店でも開きたいと、実家近くに土地を確保していた吉田さんだった。

2年早く島に帰ることを決心するには少し時間がかかった。悩んだ末、奥さんと高校生の娘を大阪に残して、単身で島に帰ることにし、5月のオープンに向けて、店名、店内の内装、メニューづくりと突貫で進めた。店名の「アザレア」は町の花つつじから名付けたもの。

共同経営者として、参加したのは従妹の中山静子さん。島で30年間看護婦をしてきただけあって、顔が広く、客への対応も手慣れている。はじめてクリスマスの飾り付けにも挑戦、「ちょっとゴージャスな気分が味わえる親しみやすい店」づくりに励んでいる。

吉田さんは、本格的なフランスの家庭料理を手軽に味わってもらえる店にしたいと語り、特にシチュー等の煮込み料理を特色にしている。仕込みにも厳しいが、地元の新鮮な魚介類や野菜、果実を使った新しいメニューも考えていきたいという。

ちょっと豪華なスペシャルランチが2500円、料理長おすすめディナーが2人で5000円。若い人達のデートスポットとしても注目されそうだ。

その他にも、Uターンしてみかん栽培をする人もいて、彼らによって町の様子は少しずつ変わろうとしている。

みかんの価格が低迷する中で「何と物好きな」という地元の人もいる。

しかし、農業を経済性で捉えず、自然と人との共生、趣味や生きがいとして考える都会人の発想こそが、町に活力と夢を与えるのではないかと思う。

「アザレア」経営の中山さん、吉田さん。

むらづくりを中高年のパワーで

〝生命行政〟の沢内村に魅せられ新しい農業と村づくりに夢を託す

広瀬龍一さんは耕運機を後ろ向き（バック）で使う。村の人に笑われるがこの方が合理的だという。

雪の暖かさを体験して移住を決心

奥羽山脈のただ中にひらけている豪雪地、岩手県沢内村。人口約4500人。「老人医療費無料化の元祖」「生命尊重」の村として名高く、都市との交流も盛んである。

広瀬龍一さん（57）が神奈川県茅ヶ崎市からこの沢内村に移住したのは、平成5年7月。とりあえず妻子と別居のかたちの、単身移住であった。それまでの彼は、大手建設会社の技術者としてエリートコースを歩いてきた。中近東・東南アジアなどの海外赴任は延べ10年ほど。15年ほど前から、「本物の生き方」を模索してきて、沢内村と出合ったのは、まちづくりプロジェクトに出向していた平成2年秋であった。

沢内村の村長と議長から、「ここを理解するには雪の沢内村を知らねばなんねな」と言われた。彼は妻を伴って、真冬の一カ月間を暮らしてみた。雪の美しさ温かさを堪能した。沢内村について書かれた何冊かの本を読み、多くの村人の「人情というか人間の営みのようなものが感じられる日々」であった。

この滞在中に、スリランカのサルボダヤ運動（政治に全く関与しない仏教精神の地域づくり）とリーダーのアリヤラトネ博士の世界観を知ったことも、大きな出合いであった。半年後スリランカで、博士の地域づくりのアドバイスを受けて、「沢内村で日本のどこにもないようなまちづくりを実施してみたい」と思うようになったのである。

地域活動に参加しながら有機農業に取り組む

退職して沢内村の住人となった広瀬龍一さんは、しばらく古い民家に仮住まいして、退職金で長瀬野地区に購入した260坪の宅地に、母屋と車庫兼納屋兼書庫の2棟のスウェーデンハウスを建てた。ことあるごとに村の集まりに顔を出し、農作業している人に声をかけて歩いて、草の根ネットワークづくりに精出した。田20反・畑25反を借りた。

6年5月から、「田舎のすばらしさの発見と体験」を目的に会報『グリーンファーム長瀬野』を発刊。同時に一口5万円で、活動のサポーターを募集した。81人が支援、458万円の資金が集まった。

地域の人たちに教えてもらいながらの農作業で、無農薬野菜をサポーターに発送した。とくに最初の米を収穫できたときの感動は大きかった。陶芸、わらじ作り、アケビかご編み、ソーセージ作り、自然観察会など、地域のグループ活動にも積極的に参加した。

広瀬さんは、多岐にわたる学習・地域活動と、そのフィードバックとしての会報の発行（年に7～10回）を通して、グリーンファーム長瀬野の目的を明確につかんだ。

1　田舎の自給に近い生活を体験し、人間本来の生き方を知り、人々に紹介する。

2　村に対して、グリーンツーリズムへの取り組みの手助けを行う。

3　有機農業の方向を目指し、関係グループ

木の実、野草、蔦（つた）、すべてがリース、手芸品に変身する。

坂本光弘さん一家と愛馬のユキ。

との連携をはかる。

計画即実行の広瀬さんは、本格的な有機農業へ向かって、EMという微生物の研修会や土壌研究会の「天翔塾」にも参加している。

定年後の移住では遅い 家屋敷と田畑2町歩を借りて

ここ5年間に、沢内村には14人（8世帯）の人が移住している。広瀬さんが親しく付き合っている坂本光弘（40）・嘉津子（41）夫妻と一人息子の泰樹君（小6）が沢内村に入ったのも平成6年。光弘さんは、海上保安庁からファーマーへの転身である。

青森県出身の光弘さんと嘉津子さんは、昭和59年に結婚、ネパール・ヒマラヤ地方に旅した。「岩穴で寝たり、山蛭に悩まされたり」の体験も楽しんだようなので、二人ともかなり気力がタフである。

嘉津子さんは子供を生み育てる過程で食べ物の問題や環境問題に目覚めた。光弘さんともども菜食主義に傾いて、夫が定年退職したら、「山見ながら悠々自適の暮らししようね」と話し合っていた。

ところが、定年を迎えて、倒れて長年の夢を実現できなくなった身近な人の例から、「働けなくなってからの移住では遅い！」と揺さぶられるように気づいたのであった。

坂本夫妻は、移住先をさがしてあちこち見て歩いた。3年目、沢内村を通りかかったとき、「ここはいい！」と直感した。「農業をしたい」と役場を訪ねた。農業委員会事務局の高橋静穂さんが応対した。優しさが奥深いこの人との出合いが、坂本夫妻の沢内村移住を決定づけた。おばあちゃんが一人住まいの大きな家屋敷と田畑合せて2町歩を、年10万円で借りることになったのである。

その家の長男は仙台に住む大学教授で、坂本さん一家が入居と同時におばあちゃんは病院暮らしとなった。仏壇も仏間の鴨居に掛かる7代の遺影もそのままなので、光弘さんは毎朝ご飯を上げておまいりしている。「別に頼まれたわけではないけど自然に」そうしていると言う。

「こういう暮らしを積極的に選択した」という誇り

ある日の夜、この家に広瀬さんが遊びに来て坂本夫妻と語り合った。

「入る前から先のこと心配する人多いね。何人か（移住の）相談に来たけど、みんな生活していけるかって聞く」と光弘さん。

「子供に教育費かけるとやっていけないけど、自給自足に近い生活だとおカネあまりかからないよね。都会の生活は本物じゃない。だからと言って都会から逃げて来た人はやっていけない。僕たちは、こういう暮らしを積極的に選択したんだよね」と広瀬さん。

「お父ちゃんが公務員いやで移住するって言うならついてこなかった」と嘉津子さん。彼女は社会福祉協議会のホームヘルパーだが、「家族はお父ちゃんが養うもの。それが男の誇りでしょ」と考え方がくっきりしている。

だから光弘さんは、80反の田と60反の大豆畑を耕作し、味噌なども手作りして売ったり、他家の農作業も手伝ったりして、「家族を養って」いる。

生産と流通をドッキングさせて

彼の営みのサポーターは、岩手県大湊市に本社がある株式会社アマタケファームで、岩手県高品質農畜水産物生産流通協議会（通称DFC）の事務局として活躍している。この協議会は岩手県で本質的な食材を生産流通させようと平成9年7月に発足した。会員は生産者・資材会社・食品会社・スーパーなど。「生産と流通のドッキングは初めて」だと、DFC会員である光弘さんは、目を輝かせて言った。ちなみに、DFCは、ドリーミング・ファーマーズ・クラブの略である。

広瀬さんもこの春からDFCに参加して、サニーレタス等の本質的野菜作りに取り組む計画。一方、地域の人たちも巻き込んで、藁葺屋根の古い民家の保存・活用運動もすすめている。また一月には「村民の翼」事業で、ドイツ・スイスなどへのグリーンツーリズム研修にも参加した。

DFC。夢見るファーマーたちの、まったく新しい農業と村づくりのたがやしは、深くしずかにすすんでいるのであった。

取材／指田志恵子

僻村は文化の発信地

高橋 治（作家・白山麓僻村塾主宰）
イラスト／北沢夕芸

始まりは一本の帯から

石川県の南・白山の麓に、白峰村という人口265人余りの小さな村があります。ここで私が白山麓僻村学校を開いて、今年で10年になりました。

千葉に生まれ、湘南に住み、根っからの海型志向の人間だった私が、この山深い白峰村とどんな縁で関りをもつようになったのか。それは白峰村の方からいただいた一本の帯が、コトの始まりでした。

「紺青の鈴」という小説の中で、私が石川県名産の牛首紬のことを書いたのですが、これを読んだ牛首の方が、お礼にと兵児帯を贈ってくださったんです。私はそれまで角帯一本槍で兵児帯というのは締めたことがなく、辞退したのですが、とにかく締めてみてくださいという。

で、送られてきた手織りの紬の兵児帯を見てびっくりしたんです。兵児帯というのは上等なものになるほど締まりが悪くなるところがあるんですが、これが実にきりっと締まる。並大抵の仕事ではない、と思いましたね。一体どんな風にして作られているんだろうと、猛烈に興味が湧いてきて、牛首まで行ってみたわけです。

その仕事は誠に手間のかかるやっかいな作業で、繭の中に蚕が二匹入ってしまうことがあるんですが、これをほどいて糸にしていくわけです。糸から織りまで、そうやって手を抜かずに質を落とさずに、一貫した作業で作られている。大変な驚きでした。

ところが、こんなに素晴らしい伝統技術が後継者もなく廃れかけていたというんですね。とんでもない話だと思いましたね。その時、知り合ったのが牛首紬をはじめ手広く事業を営んでいた西山さんという一族だったんです。やがて、西山さんの好意で、ダムで水没する農家を移築して白山の麓に山の家が作られ、時々利用させていただくようになりました。ここの炉端でいろいろ話をしていくうち、私の友人たちが集まって、ごく自然に西山一族と牛首紬の応援団のような役割をつとめることになったわけです。

地域文化の担い手を

その後もこの山の家に私を訪ねてくる知人も増え、炉端を囲む仲間も増えてきた頃に、こんな話しをもっと沢山の人に聞かせたいから、先生なんか高橋塾みたいなものをやってくれ、と村の人たちが言いはじめたんですね。

それだったらみんなで学校みたいなものをつくろうじゃないかということになり、始まったのが今の僻村塾の前身、白山麓僻村学校だったんです。

塾生は村の人たちや周辺の大学の学生、関東や他県からの参加者もいます。講義をする教授陣は私の他に、作家の大岡信、大岡伶親子、池澤夏樹、経済学者の宮本憲一、俳優の真屋響子、山本圭、それに名誉教授には東大名誉教授の西義之さん、哲学者の今道友信さん、作家の陳瞬臣さん、宮尾登美子さんなど。

白山麓僻村塾の前で、中央が高橋治さん。

他にも実業家、外交官、音楽家など幅広いジャンルの方たちが、謝礼も差し上げられないのに、面白そうだといって協力して下さっています。

「豊かな自然のもとで人間のあるべき姿を模索し、将来の地域文化の担い手を養成する場」というのを、僻村塾の理念及び校則としてうたっていますが、要は、人間を数値で振り分けてしまうような日本の教育制度が落ちこぼしたものを、補っていけたらというのが、私たちの考えです。

例えば今、日本の林地面積の5割以上が人工造林になってしまったという現実がありますが、それによって既にさまざまな現象がひき起こされています。杉花粉の問題。これなどはもう明らかに絶対量からくる問題ですし、やせた土地を好んで繁殖するという赤松などもどんどん弱って、日本の風景には欠かせないものが減ってきました。人間が山に入らなくなったために、下草刈りなどの本来の里山管理が行き届かなくなって、赤松の林は栄養のバランスが狂い、松喰い虫にも抵抗力を無くしてしまったんですね。

これらはどれも自然からの警鐘そのものだと思うんですが、こういったサインを送られても、今の人たちには受信する機能がないから、わからない。コンクリートの箱の中で生まれ、コンクリートの校庭を走り廻って、コンクリートの大学卒業して、コンクリートの霞ヶ関に勤めるんですからね。自然の中での生活体験なんて、まるで無いまま大人になっちゃうんだから、何も知らない。経済効率という尺度ひとつで国を動かそうなんてことになっちゃうわけですよ。

そうして生まれた狭い発想に基く近代先進国家志向は、牛首紬のような素晴らしい手仕事や、貴重な雑木林、伝統の食文化などをどんどん地方から追い出していくんですね。どこかで大きく間違ってきましたよね、日本は。

過疎の問題にしても、例えばNHKの大型時代劇を呼んで村おこしをしよう、というような動きがありますが、これほどアホらしい誤りもないですよね。そんな一過性のイベントで村おこしなんて出来るわけがない。第一テレビ自体がもう、日本文化の破壊者になっている。そんなものに加担して、いっ時人を集めたって、地方や過疎地がどう変わるかっていうんです?

それともうひとつ、気がつかなければいけない大きな問題点は、老人産業というのはいかに先行きの見通しをもった産業か、ということです。しかし日本全国で、町ぐるみで老人産業と取り組もうという所は、まだほとんどないんですね。

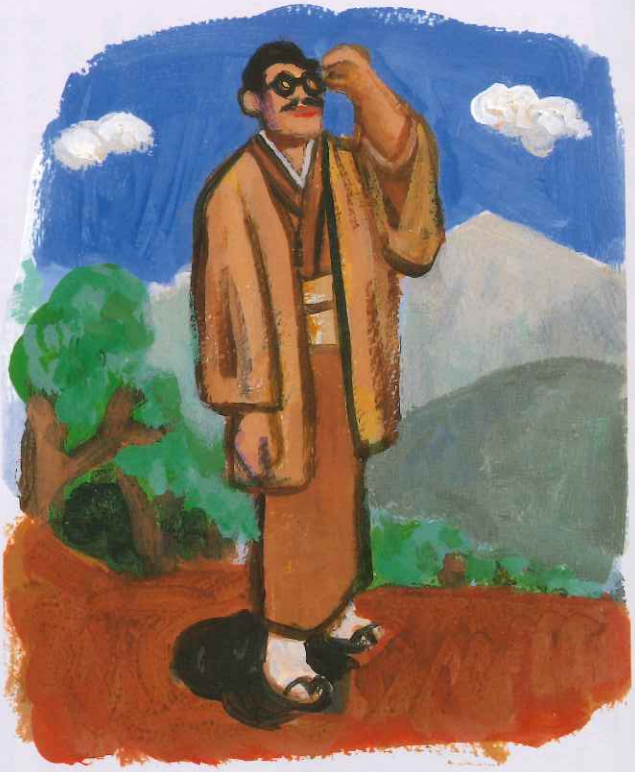
老人たちが安心して住める場所を用意する。それに加えて医療施設などを整えるのが、これからの日本の先端企業になるべきだと思うんです。

山、川、海の僻村塾へ

この白山麓僻村塾は、いわば山の塾です。この塾を海にも川にも広げていきたいというのが私の夢だったんですが、四国の高知と沖縄に共感を持ってくれる人が見つかり、川と海の僻村塾も新たに開校しました。

四万十川のある高知は私が塾長、沖縄は池澤夏樹氏が塾長です。私の理想はこの山、川、海の僻村塾に、霞ヶ関の上級職に入る連中が入省庁一、二週間前にやってきて、自然の中の暮らしを体験してくれることです。そうすれば、役人になった後もそうバカな開発は出来なくなるでしょう。自然に学びながら培ってきた地方文化が、いかに貴重なものであるか、彼らこそがきちんと知るべきなのですから。

（談）



●白山麓僻村塾

昭和63年、任意団体として白山麓僻村学校を設立。平成4年に公的支援を受けられるようにと、財団法人・白山麓僻村塾として再スタートした。高橋治氏は理事長、池澤夏樹氏が塾長。これまでに講義、イベント等165回開催。友の会入会希望者・問い合わせは左記へ。

(財)白山麓僻村塾・鶴来事務所
〒920-2-67 石川県石川郡鶴来町部入道ト40 ☎076-9(3)001-7

●高橋（たかはし） 治（おさむ）氏

1929年千葉県生まれ。東京大学文学部卒業。53年松竹入社、映画監督として活躍。65年退社後作家活動に入る。83年「秘伝」で直木賞、88年「別れのちの恋歌」で柴田錬三郎賞、96年「星の衣」で吉川英治文学賞授賞。主な作品に「絢爛たる影絵」「風の盆恋歌」「流域」「短夜」「くさぐさの花」「青魚下魚安魚賛歌」などがある。

田園生活こそ充実の時

土や植物とふれあう安らぎの里

（群馬県倉渕村）

「家族が力を合わせて働ける仕事」として農業を選んだ近藤さん一家は、倉渕村の山間の集落の休耕地を借り花卉栽培に挑戦。いまでは障害者や高齢者の雇用の場になっている。

それが契機となり、村では隣接する地に、都会の人が土や植物、自然とふれあう場としてクラインガルデンを開設。家庭菜園で汗を流したあとは「ふれあい館」で温泉につかったり宿泊したりすることが出来る。

「農業は経済面だけでなく、健康、福祉、教育、環境などのさまざまな機能を持っている」と近藤さんが語るように、倉渕村は人々に安らぎと充実、ふれあいを提供してくれる〝滞在型都市農村交流の場〟になりつつある。

指導に当たる近藤まなみさん（右端）

山里に移住し家族の夢を実現
フラワービレッジ・近藤さん一家

近藤さん一家が都市の暮らしを整理し、倉渕村の山間の集落に移り住み、花卉栽培をはじめて11年になる。

家族の夢を結集した花づくりは、さまざまな障害を乗り越えて見事に開花、農事組合法人フラワービレッジ倉渕生産組合は、地域のお母さん達、障害を持つ人達、そして農業を学びたいという研修生等が楽しく働く農園となった。都市の消費者に四季折々の草花やハーブ類を直送する他、イベント会場や病院、公園等のガーデニング・プランでも実績を上げている。

近藤さん一家が農業をやることになったのは、軽度の知的障害を持つ長男岳志さんの将来を考えて、「家族が力を合わせて自然の中で暮らそう」と父親近藤龍良さん（フラワービレッジ理事長）が家族に提案したことにはじまる。

近藤さん一家は自然大好き派。趣味で花づくりをしていたので、花卉で生計を立てようという夢物語に全員賛成、そのストーリーにそって準備活動を開始したが、農園を始めるまでには14、15年の年月がかかった。別の場所でやっていたが、倉渕村の休耕地活用の話が持ち上がり86年に倉渕村に移住して、本格的に農園づくりがはじまった。

近藤さん（62）は千葉県松戸市に住み、東京で商事会社を経営していた。家族移住を決めてからは、仕事をセーブしながら猛勉強を開始したといい、企画力や販売力等の経営ノウハウが、農園運営に生かされている。

奥さんの信子さんは、もともと花づくりが好きで団地の庭をいつも花いっぱいにしていた人。農園ではクラフト部門でも活躍、取材に伺った日はクリスマス用のリース製作をパートの女性達に指導していた。

農場長として現場で花卉栽培に当たっているのが長女のまなみさん。千葉大学の園芸学部を卒業後、ドイツの農場で一年間研修してきた本格派で、日本フラワーデザイナー協会認定の一級資格を持っている。

従業員を指導しながら実にキビキビとよく働く。昨年は『癒しのガーデニング』という本も出版するなど、カントリー未来派の第一人者といえる頼もしい女性である。

長男岳志さんもいまではベテランの園芸師。

蔦や木の実、ドライフラワー等でリースづくり。左が近藤夫人。

近藤理事長

「早く大きくなあれ」と声をかけて水やりし、よくお喋りしては人を笑わす。さらに今、二女のなおみさんも園芸師をめざして修行中。

同所には知的障害を持つ若者らが常時3、4人働きにきている。園芸作業を通じて心を開き、目に見えて自立心を高めていくという。

「農業は経済面だけでなく、健康、福祉、教育、環境など、さまざまな機能を持っている」というのが近藤理事長の持論。「自然や花づくり、その作業が、私たちの心身を癒してくれたり励ましてくれます。最近日本でもホーティカルチャル・セラピー（園芸療法）が注目されるようになり、障害を持つ人や痴呆性老人の治療にも効果が出てきています」

販売部門を担当する近藤さんは、出来るだけ自然に近い方法で手間ひまかけて育てた愛情いっぱいの花卉を、都市生活者に直接届けるように整備。さらに公園や病院、人々が集まる施設などのガーデニングを手がけ、花卉に付加価値を高めると共に、植物がいかに素晴らしく大切なものであるかについても説いて歩く。

昨年秋広島市で開催された「グリーンフェスタひろしま」では、会場中央の広場で障害者も参加してつくる〝癒しのガーデニング〟を提案、障害を持つ人々や家族の交流の場として人気を集めた。

「ここで働いていると笑える」と地域のお母さん達

長い年月放置されていた休耕地は開拓にも時間がかかり、山間いの里の冬は林の陰になり日照時間が短い。早春には上州名物の空っ風が農場のビニールハウスをまき上げて吹き飛ばしてしまうこともある。そんな苦労と闘いながらもやってこれたのは自然・植物の持つ力の素晴らしさに学び、感動することの方が多かったからだとまなみさんは語る。

フラワービレッジでは現在年間30品種ほどの花壇用苗と150種類ほどのハーブ類を栽培している。それぞれに色が違うので、300～500位の種類を生産していることになる。これを花壇づくりや納期に合せて栽培していくのはなかなか大変で、「とくに今の市場は、季節より早く、他より変わったものを出荷しないとやっていけない。輸入生花も増えているので価格競争もあり、まだまだ悩みが沢山あります」と言う。

お茶タイムには全員集合。食べてお喋りして話がはずむ。

午前8時からはじまった作業は午前10時にお茶の時間で休憩。各ハウスから全員集まってきて、お茶を飲みながらお喋りに花が咲く。

地元からいつも5、6人のパートのお母さん達が働きにきており、手作りの漬物や煮物、果物などを持ってきてくれる。お母さん達は「家にいるよりここへ来ると話ができるし、笑えるからいいのお」と言う。お茶タイムには郵便屋さんや宅配便のお兄さんも立ち寄るなど、水沼地区のコミュニティの場にもなっている。

お母さん達は普段午前中で作業を終了し、自宅へ帰っていく。「昼からは家のこともパッパッと効率よく出来て、体調もいいのよ。帰りがけに温泉でひと風呂浴びればなお最高だね」と語っていた。

家庭菜園のあとは「ふれあい館」で花と緑の手づくり村（クラインガルデン）

その温泉、倉渕村名物「相間川温泉」は倉渕クラインガルデン「ふれあい館」にある。ふれあい館開設に伴いボーリングしたところ、高温で泉質の優れた天然温泉を探り当てた。透明な湯が空気にふれると琥珀色に変わるという湯で、山々を眺め野鳥の声を身近に聞きながら入る野天風呂が人気を集めている。

倉渕村（人口約5300人）では耕地面積の約1割に当たる70㌶が遊休農地で、その活用が長年の課題となっていた。そんな時、就農地を探していた近藤龍良さんと柴木宇一郎村長が出会った。近藤さんがクラインガルデンを提案したことが、「花と緑の手づくり村」構想の策定へと発展し、クラインガルデンづくりがはじまった。

91年6月、相間川のほとりの休耕地に25区画（1区画40㎡）の農園用地と宿泊用ログハウス5棟が出来上がった。都市向けに入村者

近藤まなみさん。

ふれあい館、山田施設長

丘の上に立つふれあい館

を募集したところ反響は大きく、翌年には農園をさらに拡充して、251区画、1万2332㎡のクラインガルデンが完成した。全体では4万3000㎡の面積があり、農園ゾーン、ログハウスの他にコミュニティゾーン、ふれあい広場などがある。

クラインガルデンとはドイツ語で「小さな庭」のこと。ドイツでは歴史が古く、今から130年ほど前の産業革命のあと、都市住民に精神的な病いの子供が増え、その治療法としてシュレーバー医師が菜園づくりを取り入れたところ効果が大きかったことから、いまに引き継がれ、ドイツだけで70万区あるという。

倉渕村クラインガルデンは、現在178人が契約していて、ガルテナー（農園利用者）の3分の2は東京、埼玉、神奈川、千葉の首都圏居住者。年間延べ約6000人、週100人以上が訪れている。

取材に出かけた日は11月末の平日で、秋の収穫も終了した時期のせいか、二、三組みのガルテナーの姿しかなかった。

その一人、東京から毎週出かけてくるという中島さんは、40㎡の用地を上手に活用して、ブロッコリー、白菜、下仁田ネギなど約10種の野菜を栽培していた。端の方には落葉を積んで堆肥を作っている。

「当初から借りているのでもう6年になります。朝4時に家を出て、ここでのんびりお昼を食べ、2回に1回はふれあい館で風呂に入ったりお茶を飲んでのんびり過ごします。川のせせらぎや野鳥の声を聞いて作業し、無農薬の採れたての野菜を家へ少しずつ持ち帰る。ここは私の老後の生きがいの場所です」

と語る中島さんだが、その日はちょっと不機嫌だった。というのも、毎週のように行政関係者らしい背広姿の人達が見学に来て、農園を見て歩きながら笑ったりしており、「冷やかされているようで不快だ」と言う。

確かに、日本ではクラインガルデンや倉渕村がめざす滞在型休養施設はまだめずらしい。しかしまだ行政やマスコミが注目する程には宿泊施設の利用率は高くはない。（ログハウス利用1630人、ふれあい館5100人）

「東京から車で2時間余で来れるので日帰り利用者が多いんです。滞在して本格的に菜園をやりたい人には農園の広さは物足りなく、家族でレジャーのつもりでくる人には遊びの要素が少ないということでしょう」と、ふれあい館支配人の山田則男さんは分析する。

地域や農家に活気が出てきた

クラインガルデンを見降ろす丘の上に建つ瀟洒な建物が「ふれあい館」。宿泊室、レストラン、ふれあい室に加えて、一昨年より天然温泉がオープン、新たな魅力が加わった。

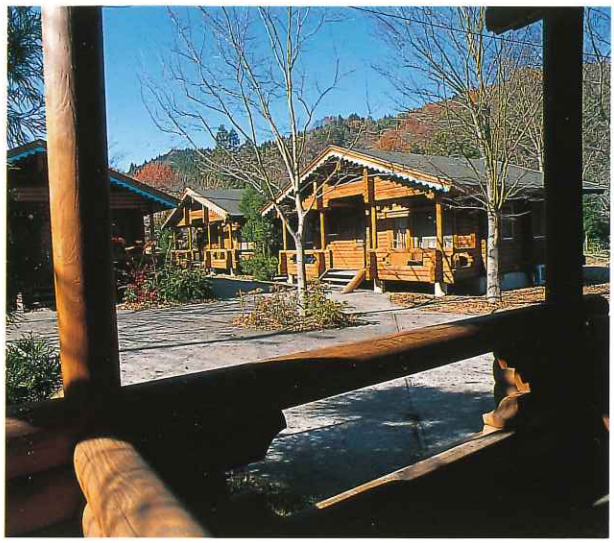
管理運営は、村が8割、残りを農協、商工会、森林組合、地元金融機関が出資した第三セクター、相間川温泉株式会社が当たっている。

農園使用料（一区画平均年1万円）も少ないので、ふれあい館の運営は厳しいが、クラインガルデンの開設で地元農家の有機栽培や高齢者の花卉、育苗生産の取り組みが盛んになり、地域に活気が出てきた。レストランでは地元のお母さん達が開発した手づくりの菓子、そば、漬物なども売られている。

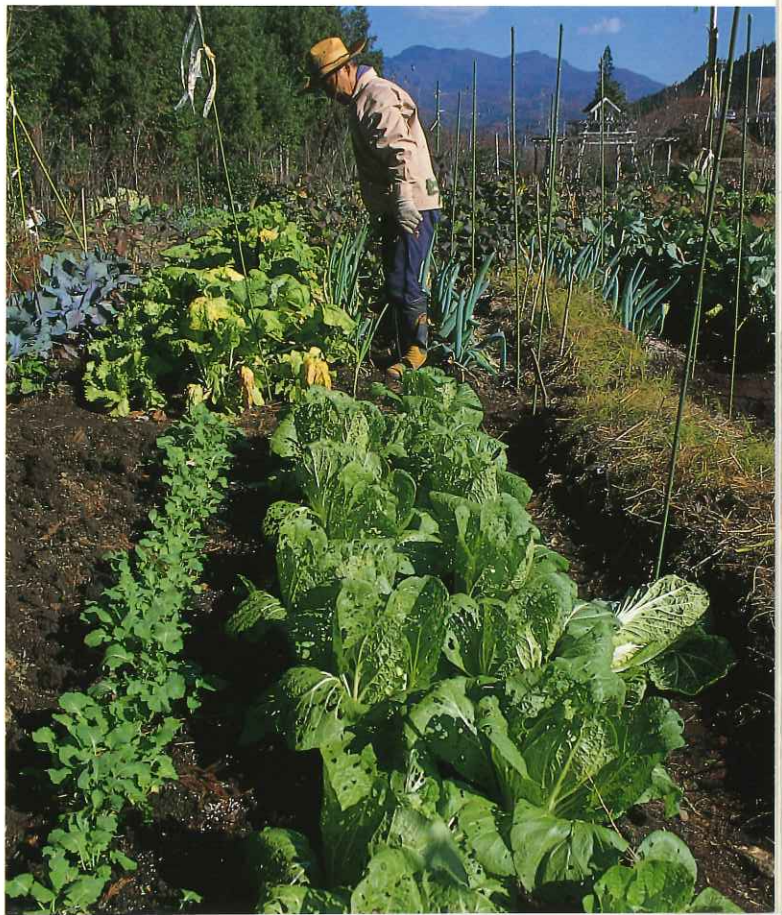
農業衰退から、「農」の持つ多面的機能が再認識されて活気を呈してきた倉渕村。美しい自然や人情、フラワービレッジやクラインガルデンの先進的な取り組みに魅せられて、新規就農家族が5組入村してきている。

フラワービレッジ☎0273（78）3310
クラインガルデン☎0273（78）3834

文／浅井登美子　写真／小林 恵



クラインガルデン内には5棟のログハウスがある。



東京から毎週、菜園づくりに出かけてくる中島さんの畑。

福祉施設を核に

「町はホーム、ホームはまち」

［ユーシャイン］はUターンの老婦人も受け入れた

（広島県総領町）

総領町高齢者福祉総合センター「ユーシャイン」

トータルケアホーム「ゆう愛」中央ホール。原田主任と入居者たち。

右／独立した間取りで5世帯が入居中

「町のようなホーム、ホームのような町づくり」をめざす総領町（人口約2000人）には、人々の暖かいふれあいと出会いがあった。

高齢者福祉総合センター「ユーシャイン」は小規模多機能型の施設で、大阪からUターンした女性を受け入れるなど、柔軟な対応をしながら、地域住民の文化、交流の拠点にもなっている。

●「過疎を逆手にとる会」の発祥地

初冬のおだやかな休日。中国山地の南側、田総川に沿って総領町に入っていくと、御殿のような新築の家々が建つ田総の里地区に出た。下流にダムが出来るため移転した住民の家だそうで、同地区ではマラソン大会が開かれていた。

ゴールをめざす小中学生、中高年ランナーを応援するため、住民のすべてが通りへ出て旗をふったり声をかけてはげまし、ゴール前の広場ではお母さん達がおにぎり等を作って到着者を待っていた。

皆んなにはげまされ、照れながらも必死に走る子供たちを見ていると、この町では子供たちが本当に大切にされているんだなと改めて感じる。

ほどなく町の中央部稲草地区へ着く。ここには、過疎問題に周辺地域の若者たちが正面切って取り組んだことで有名な『過疎を逆手にとる会』の拠点がある。

20年ほど前に廃校になった高校を利用して開設、中国山中の若者たちはここで学び、都市の文化人等とも交流して、地域づくりの核となった。これから訪れるユーシャインの熊原保所長や役場町づくり推進課長の和田芳治さんも「過疎を逆手にとる会」の創設メンバー達である。

現在、多目的研修施設「ふるさとセンター総領」として活用されているが、集会室は当時のまま。

永六輔やミュージシャンらが毎年のように来町して開かれたシンポジウム。その時のシンボル、白いピアノはそのまま部屋の隅にいた。カーテンを開けると、サインでいっぱいのボディを輝かせて、今でも歌い出しそうに見える。

広場（校庭）ではゲートボール大会が開かれ、福山市からきたチームと町の代表チームが激戦中だった。最近のゲートボール選手達はユニホームを粋に着こなし頭脳プレーを楽しむ。高齢者の手軽なスポーツといったイメージはなく、華やかで活気に満ちた高度なスポーツなのだということを、最近は各地で実感することが多い。

●週末にはふるさと総領へ

そのグラウンドの隣りに時計台のあるおし

「過疎を逆手にとる会」の拠点でもある「ふるさとセンター総領」。校庭はゲートボール場に。

週末に来る田辺良平さん夫妻

ユーシャインの熊原保所長

やれな家があり、見ると玄関に「WELCOME Talking House ルーエよこまくら」と書かれた看板が掲げてある。

広島市内に住む田辺良平さん（63）が毎週、週末に出かけてくるセカンドハウスだそうで、我々の取材依頼に快く応じてくれた。

田辺さんは総領町出身、広島市の銀行を昨年定年退職し、現在は「広島壮年走ろう会」の会長をするかたわら、ミニコミ誌の企画編集、イベントのプランづくり等、地域活性化問題等に関わっている。

マラソンは40歳からはじめたそうだが北京、ホノルルマラソンなどにも出場、国内の主要なマラソン大会にも参加して現在39県制覇、残る8県の大会を走るのが目標だと言う。奥さんの綺子さんは趣味で絵画、手芸等を手がけ、家の中には知人や著名人の絵画などが飾られていた。

「私は原爆で広島の家を焼かれ、ここ総領で中学を出るまで暮らしたんです。当時は人口5000人だったんですが、いまは2000人になってしまった。高校から町を出てしまい広島などに住みついてしまうんですね。

数年前に広島市に住む総領の人400人に呼びかけて広島総領会を作りました。総領の良さを皆んなにPRし、催しの時は総領に行こう、ふるさとを応援していこうというものです。正月には広島市内で400人が出て餅つき大会などのイベントを行います。

永六輔さんも言っているように、総領は本当にいい町です。夏は涼しく冬は暖かい。夏休みにはこの家に15、16人来て泊まっていくし、『走ろう会』の例会もよくここで開催します。いまは子供達が転勤のため広島の家を空けるわけにはいきませんが、子供が帰ってきたら、夫婦でこちらに来て暮らしたいと思っています」と田辺さんは語っていた。

朝起きたら、近所の人が届けてくれた野菜と柿が勝手口に置いてあった。「何よりも嬉しいごちそうです」と言いながら、夫婦はカメラの前でポーズを取ってくれた。

●ユーシャインは〝遊サロン〟

さて、いよいよ本誌取材の目的地であるユーシャインへ。町の東部・中領家地区にあり、元小学校跡地に5年前にオープンした。

広々とした丘陵地に、特別養護老人ホーム、ショートステイ、デイサービスセンター、在宅介護支援センター、さらに隣接してトータルケアホーム「ゆう愛」、昭和初期の民家を移築した「レミニセンス・夢語りの家」がある。

特養ホームは30床と規模は小さいが、在宅者の入浴から食事等を提供するデイサービス、別荘感覚で短期間滞在するショートステイ等に力をいれており、また、ユーシャイン内に本部を置く在宅介護支援センターでは、看護婦とホームヘルパー6名が年中無休、24時間体制で町内の独り暮らしや寝たきりの高齢者を訪ねて身辺の世話に当たっている。

農山村に行くと、独り暮らしになっても先祖代々の家屋敷を守るために頑張っている老人たちが多い。どんなに具合が悪くても家を離れたくない、他人からほどこしを受けるなんてとんでもないと考えるお年寄り。その人達に甘えてもらい、役に立ちたいと熊原所長は考える。

「そのために介護が必要になったら老人ホームへ入所するということではなく、デイサービスにきて入浴したり食事を楽しんでもらうことで在宅をサポートしていきたい。ユーシャインはその中枢となる施設で、住民みんなが自由に楽しく利用できるサロンなんです。最近は、子供時代に戻って学校へ行くようだね、とデイサービスにくるのを楽しみにしているお年寄りが増えました」

ホームの中には、玄関や廊下を活用してミニ美術館、「遊サロン」と名づけた喫茶コーナーもあり、特養ホームの各部屋は広々としたスペースに衣類や食品を置ける棚や机、テレビ等を配した家庭的な雰囲気にしている。

「レミニセンス・夢語りの家」ではいろりを囲んで子供がお年寄りから昔の話を聞いたり伝承技術を学んだりする他、町民やケアワーカー達の研修の場としても活用されている。

福祉系大学を出て以来高齢者福祉の現場で働いてきた熊原さんが求め続けてきたシルバーポリス構想は、ふるさと総領町に帰ってユーシャインで実現されつつある。それは高齢者だけを対象とした総合福祉センターではなく、生活福祉総合ステーションとしての機能を集積すること。住民が「この総領に生まれ住んでよかった」と思える福祉のまちの拠点

上／特別養護老人ホームの多目的ホール。
壁や廊下には絵画を飾ってミニ美術館に。
下／「レミニセンス・夢語りの家」

中領家地区の手作り秋祭り。女性たちが太鼓を打って獅子舞を披露したあと、子供たちの相撲大会が行われた。左／手書きで染め直した幟旗

になることだと熊原さんは考えている。

●大阪から帰郷してトータルケアホームへ

トータルケアホーム「ゆう愛」はしなやかな発想で生まれた家。高齢者と障害者が一つ屋根の下で助け合って暮らす家で5世帯、7名が住んでいる。病院を退院したあと自立的生活が出来るまでの訓練の場にも使える。台所やバス・トイレ付き、外から自由に出入り出来る玄関もあるが、建物の中央には入所者や来訪者がゆったりくつろげるホールを設けるなど、アイデアに満ちた豪華なハウスである。

ここに入所している木下末子（78歳）は大阪に55年間いて、3年前にふるさと総領に帰郷した。

「夫は早よう死んで（35歳）しまい、清掃会社の職員として府庁で働いてきました。婦長として若い人を指導してきたんだけど、子供もいないし、ふるさとへ帰っておいでと甥夫婦が親切に言ってくれるので、帰ってきて甥の家へ同居させてもらったの。そうしたらユーシャインに入れることになり、いまはここに住みながら甥の家へしょっ中遊びにいっています。皆んなに助けられて私はほんまに幸せ者です」と木下さんは言う。

木下さんは三度の食事も自分で作っているが、必要に応じて特養ホームのレストランやケア・サービスも受けられる。入居利用料は月額2万1000円だが、減免措置もある。

ケアホームには、入居者の世話をしながら高齢者福祉を現場で学びたいと日本青年奉仕協会から派遣され、ボランティア活動をしている竹田英子さん（26・北海道出身）もいた。

●地区の皆んなが参加して手づくりの祭り

その日、中領家地区では国津神社で秋祭りが行われていた。木下さんの甥昭三さん夫妻もいるというので、熊原所長の案内で出かけてみた。

家々を見降ろす段々畑を登っていくと丸木作りの古い鳥居があり、神社の手前にはお母さん達が代々伝わる古い幟を再現したという手づくりの幟旗が威勢よくはためいている。獅子舞いの衣もしぼり染めをして新調した。

神社脇の小さな広場で、地域の女性たちが円陣を組んで小太鼓を打っている。この神社に伝わる神楽を伝承していこうとみんなが心を一つにしての手づくりの祭り。神楽の練習のあとは、子供達の相撲大会が行われ、優勝したのは熊原所長のお嬢さん（小6）だった。

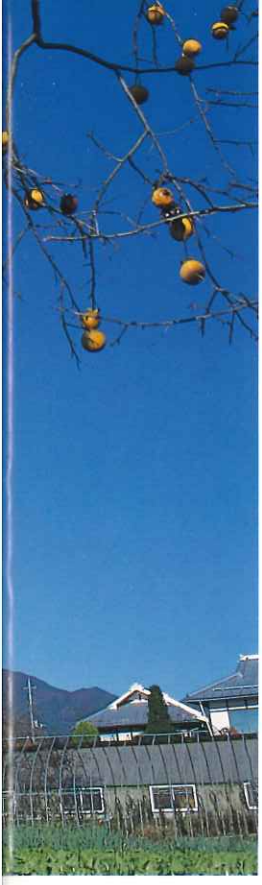
木下昭三さん夫妻もいた。

「私も昨年定年退職したので、今は農業と冬は狩猟を楽しんでいます。子供は独立して出ているので、末子おばさんにはぜひ帰ってくるように言いました。家も空いているし野菜も果物も食べきれんほどある。病気になったらユーシャインもあるんだから、こんないいところは他にありませんよ」と木下さんは壮快に言い切った。

●ユーシャイン☎0824（88）3000

文／浅井登美子　写真／小林 恵

大阪からUターンしてユーシャインに入居する木下末子さんと甥の木下昭三さん夫妻。



福祉施設を核に

自然郷・川場村で「安心」の老後を

首都圏からの入居者で賑わう［ベジル尾瀬］（群馬県川場村）

老後は、ケア体制の整った老人福祉施設で同世代の人々と安心して暮らしたいと有料老人ホームの入所を希望する高齢者が増えている。公的な養護老人ホーム等に比べて、個人のプライバシーが保たれ、入所条件もない。

有料老人ホームというと、今までは都市部に近い場所に多く、入所金が2～3000万円以上かかり、一部の人しか入所できなかったが、最近は地方の町村にもオープン。豊かな自然環境と入所しやすい価格で、都市の人々に人気を呼んでいる。

●約半数が東京からの入所者

世田谷区民との交流を通じて、自然の素晴らしさ、豊かな農業大地、ふるさとらしい景観を大切にする「ふれあいの里」川場村。沼田市から村に入ってほど近い場所に「ベジル・ほたか会グループ」が経営する二つの有料老人ホームと病院、診療所、特別養護老人ホームなどがある。

平成2年に開設した有料老人ホーム「ベジル尾瀬」を訪ねた。

周辺を山々に囲まれた景勝地に、ほたか病院をはじめ、診療所、ケアハウス、老人ホーム、介護研修センターなどの福祉・医療施設があり、ベジル尾瀬もその一角にある。

7階建てのおしゃれなマンション風建物で128名が入所している。

東京都内から60名以上が移住、入所しており、川場村と縁組提携している世田谷区からは20名が入所している。他には埼玉県、横浜市と首都圏からの入所者が多く、地元群馬県からは20名と意外と少ない。

これは、地方の方が、独り暮らしや高齢世帯でも暮らしやすく、介護が必要な場合は公的な施設へ入所するケースが多いからだろう。

都会では、いくら健康で自立的生活が可能な人でも、マンションなどでは高齢者の入所を厭がる傾向があり、かといって病気にでもならないと養護ホームへは入所できない。その待機者は普通200人、300人ともいわれ、生活に便利といわれる都市で高齢者が独りで安心して生きていくのは結構大変なことなのである。

●川場の環境と人情に魅せられて

「ベジル尾瀬」は、2、3階が介護を必要とする人達のための6名定員のベッドルームになっていて、ナースステーション、機械浴室などがあり、食事介助、身辺の世話などを24時間体制で行っている。

4階、5階は主として夫婦室。室内に、トイレもある広々とした個室で、夫婦以外では母と娘、障害を持つ子供と親などが入所している。

世田谷区民との交流事業の中で、川場村を第二のふるさとに決めて移住してきた人も何人かいて、息子さんは村内でアトリエを開いて忙しく活躍、母親はベルジ尾瀬に入所して元気に仲間たちとの共同生活を楽しんでいるというケースもある。

個室では、川越市出身の堅木啓二さん（69）の部屋を見せてもらった。少し足が悪いが、身辺をきれいに整頓し使いやすく工夫している。

「妻に早く先立たれ子供がいないのでここに来ました。ここなら何があっても安心。食事もおいしいですよ」

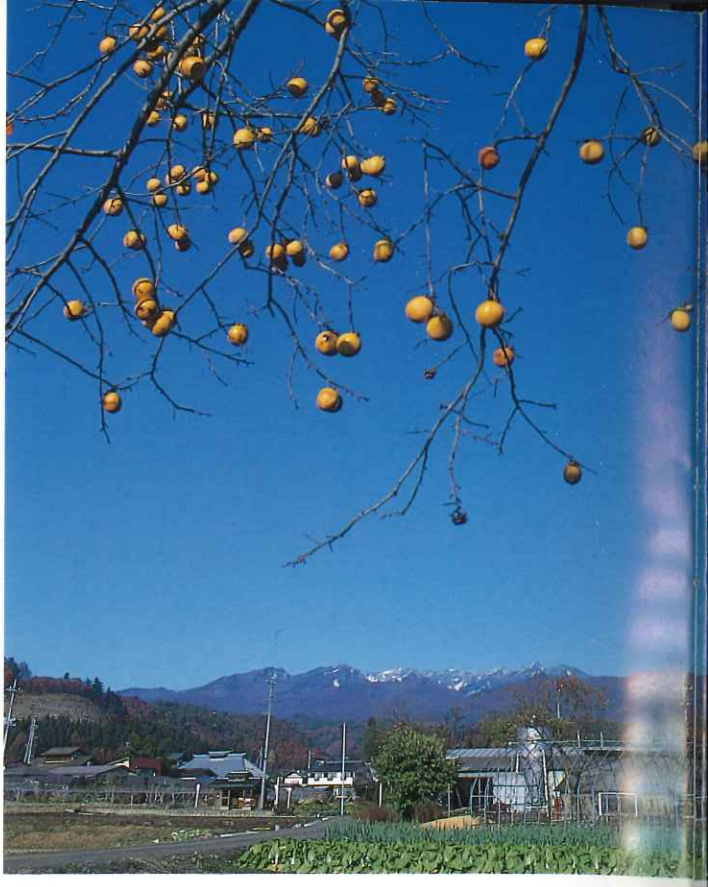
その向かいの部屋に住む大宮市出身の小宮登志さんは入所してまだ数週間目の女性。お気に入りのペルシャ絨毯を敷いて和風に使っている。

「川場へはペンションを利用しによく来ていました。景色もいいし人情も厚いところなので、ここを終いの棲家にしようと思って…」と語る。午後3時だが、早めに入浴しようと7階のラウンジへ。ここには広々としたホテル並みの天然温泉があり、温泉気分で入浴が楽しめる。

2階にある大ホールでは、明日開催される文化祭の準備に追われていた。生け花をする女性グループは、普段から園庭の植栽活動にも熱心な人達。

そのリーダー的存在の小池やえさん（72）は大田区大森出身。食品関係の店を経営して

「ベジル尾瀬」の建物



美しい田園、川場村の秋。前方に見えるのは武尊山。

小宮さんの居間。

いたというだけあって、川場村の農産物には大変関心があり、農家へも積極的に出かけて交流する。園の裏側の畑250坪を農家と交渉して借り、そこに仲間と野菜や花木を植栽している。

「家庭菜園をするのが夢でした。だからここには開設と同時に入所しています。農家にもよく出かけて、上がりこんではお茶や果物をごちそうになるの」

小池さんと仲良しの瀬川たか江さんは93歳とは思えないほど元気ですがすがしい園の人気者。東京麻布でご主人と機械工具の会社を経営していたという。

「身体を動かしているのが健康の秘訣です。私が住んでいた東京はすっかり変わって年寄りには暮らしにくい街になりました。ここの住人は東京の人が多いので、思い出話もはずんで楽しい毎日ですよ」と語る。

高円寺出身の大塚スエさん(80)、三鷹市出身の加藤志づ枝さん(84)。「区の紹介でここを知り、見にきてすぐ気に入りました」と、開設当初から入所している。

大抵の人が、区や市町村の窓口で情報を得ている。

斉藤光子さんはまだ60代。「足が弱いのでリハビリを兼ねて入所しました。病院があり、デイケアがありショッピングセンターもある一つの街だから、便利で安心です」

斉藤さんはとても歌が上手で、文化祭にも独唱するのだと仲間の一人が教えてくれた。

園裏手の畑へ案内してもらった。冬に向かって野菜の栽培は終え、菊が最後の花を咲かせていたが、花壇には盆栽仕立ての鉢の中にミニ神社も作られ、皆んなが植物とのふれあいを楽しんでいる様子が伺える。

●年金で安心して生活できるように

関保義施設長からお話を伺った。

「ここはベジルほたかグループの有料老人ホームとしては3号館目で、近くにベジル武尊があります。できるだけ入居者の負担を少なくし、サービスはどこにも負けないようにと開設しましたので、入居金は個室が200万円から。広い夫婦室でも600万円代です。月額利用料は食費、管理費を入れて一人15万円。介護費は別途に最高5万円以内ですので、年金で十分まかなえると思います。眼の前に病院やリハビリセンターなどがあるので、保健医療面でも安心ですし、食物も地元産の野菜や果物をふんだんに採り入れているので好評です」

川場の祭りや農業祭などにもできるだけ参加しているが、施設柄、地元の住民がホームへ来ることは少ない。東京からは毎年立教大附属中学校の生徒やOB達が窓拭きなどのボランティア活動に来てくれるという。

入居率は現在85%、あと20~30人は入居できそうだ。

●ベジル尾瀬／群馬県利根郡川場村生品1828☎0278(52)3333

▲文化祭の準備に忙しい入居者の皆さん。
◀世話好きで菜園づくりのリーダー・小池さん（右）と瀬川さん。

地球環境にやさしく自然と共生するまちへ。失われた自然の再生、森や河川、大地の保全等を通じて、〝心の豊かさ〟も耕していく。そんな活動をシリーズで紹介。

▲竜飛岬とウインドパーク。海洋の先には北海道が見える。
▼竜飛ウインドパーク記念館

海峡を渡る風は未来の無限のエネルギー

竜飛ウインドパーク（青森県三厩（みんまや）村）

〝風〟をネットワークに第4回「風サミット」

そよ風、春風、つむじ風、突風……。地球上ではいつもどこかで風が生まれている。太陽の熱から生まれた自然そのもののエネルギー、風。石油、石炭、水等の限りある資源に代わる自然エネルギーとして活用できないだろうかという研究開発が日本でもようやくはじまり、一部の地域や施設に電力を供給できるまでに実用化しはじめている。

〝風を見る、風を聴く、風と遊ぶ〟をテーマにした第4回「風サミット」は昨年の9月26日北海道えりも町で開催され、風力発電機を設置、または今後設置しようと計画している全国の35市町村をはじめ、新エネルギー技術開発団体、電力会社、マスコミ、専門家等が一堂に会して研修会、情報交換等を行った。

今までとかく敬遠されてきた風だが、エネルギー源として活用できれば、再生が可能で永遠に無償で得られる地球に一番やさしいクリーンな資源となる。

しかし本格的に稼働しエネルギーとして活用するためには場所、技術力と巨額な設備費がかかる。とりあえず、シンボルとして風車を設置し、住民に地球や自然への関心を高めてもらうと共に、〝新しい風〟の吹くまちにしようというねらいもある。

国内の風力発電設置は、国が昭和61年、地球環境への関心が高まる中で、サンシャイン計画の一つに「大型風力発電システムの開発」を打ち出したことで、各電力会社もプロジェクトチームを作って研究開発に力を入れてきた。その中で、年間780万キロワットの電力を発電する東北電力の「竜飛ウインドパーク」が我が国最大の規模を誇っている。

日本一の風の岬に羽ばたく11基

津軽半島の突端にある竜飛（たっぴ）崎は、標高100㍍の台地が急に海に落ち込んでいる地形で、日本一風が吹き、強風の場所として知られる。とくに秋から冬にかけては季節風の通過道となり、人がそこに立つことを阻む。過去には風速75㍍を記録したこともあり、年間平均風速は毎秒10・1㍍、まさに「日本一の風の岬」なのである。

おだやかな秋日の中で羽根を休めて——

▼ウインドパークに勤務の佐々木さん(左)と小林さん。タワー内にはエレベータもある。

東北電力の「竜飛ウインドパーク」(集合型風力発電基地)は、竜飛崎にほど近い丘の上にあり、敷地面積2万6000平方㍍の草原に11基の風力発電機が立つ。

平成4年から7年にかけて10基が設置され、8年10月には通産省の外部団体NEDOの一回り大きい風車も1基加わった。この風車は高さ30㍍、羽根の長さは直径28〜29㍍(NEDO35㍍)と巨大なものだが、環境を考慮して開発されたというだけあって、三枚の羽根はシンプルで美しく、大空に羽を広げた白い鳥たちを思わせる。

風の研究を20年以上行ってきた東北電力研究開発センター(仙台市)の土屋敬一主席研究員は、風力発電機の設置には発電に好条件な風が頻繁に吹くこと、プロペラが回転する時に音が出るので、近くに人家が少ないこと等をあげ、竜飛崎は最適な立地条件にある上に、青函トンネル工事のために道路や周辺の土地も整備されており、低コストで建設ができたと言う。

「年間787万キロワットの電力を発電します。これは2300戸の家庭が1年間に消費する電力に相当しますので、三厩村の住民の電力をほぼ賄える計算です。現在は発電時間率が65・5%、設備利用率が30%ですから、本稼働はこれから。より安全に正確に無人運転を行う最新コンピュータシステムであるために、一基当たりの設備費が一億円近くかかっており、他のエネルギーに比べると割高ですが、風から大きなエネルギーがコンスタントに引き出せるようになれば、人類にとって飛躍的な進歩になります」

研究開発と設置には三菱重工㈱が共同プロジェクトで参加した。ガラス繊維の強化プラスチックで作られている羽根は、風の吹く方向に自動的に向きを変え、5・5㍍(毎秒)の風で発電を開始、24㍍以上の突風になると自動停止する。ここで捉えた風力電気は事務所一階の変電所に送られ、送電線で他の電力と合流する。

三厩村のシンボルは地球の息吹きと最新技術の粋

昨年4月に東北電力青森支社から赴任してきた小林弘幸さんは民宿「岬」に宿泊、宿の夫婦が息子のように面倒を見ている。海の幸とおふくろの味たっぷりの食事は最高だと小林さんや訪れた技術者たちに人気がある。宿の奥さんは言う。

「ここの吹雪は凄いよ。でも風車のうなる音を聞くと、風に立ち向かって頑張っているんだとはげまされる。ウインドパークは竜飛崎のシンボル、村の誇りです」

夜になると風車はライトアップされ一段とファンタジックで神々しくさえある。イカ漁などの漁師達にも、羽根の動きを見ながら海洋の様子がわかると人気者だ。

佐々木正喜さんは機械通のベテラン技師であると共に、地元との橋渡し役的存在。津軽弁を混えながら三厩村のPRも忘れず、村内の名所を案内してくれた。

「青函トンネル工事には延べ370万人が従事し、村はトンネルブームに沸いた。竜飛崎のたばこ屋の売り上げが全国一だったという話もある位、村中に活気があった。工事が終ると技術者と一緒に村の娘や若者も出ていってしまい、6000人を越えていた人口は3000人に減ってしまいました」と佐々木さんは言う。

全長53・85キロ㍍という世界一の海底トンネルは25年間の調査を経て昭和39年に工事がスタート、断層や出水と闘いながら60年に完成、63年より開通した。

村では63年に青函トンネル記念館を建設。トンネル工事を立体模型や映像で迫力満点に展示し、海面下140㍍の体験坑道駅へ列車が運行している。年間10万人の観光客が訪れる観光名所になった。

青函トンネル記念館に隣接して東北電力が2年前に開設したのが「竜飛ウインドパーク展示館」。風と人類の関り、ウインドパークのメカニズム、風を体験できるコーナーなどがあり、子供達にとっても楽しい科学館である(無料)。

三厩村は自然の営みと人間のテクノロジーを結集したいま一番ナウい村ではないかと思う。

地球の息吹きを感じに出かけてみてはいかが。

取材／浅井登美子

風を活用し、風と遊ぶ 立川町「風車村」(山形県)

第一回「風サミット」を開催した立川町には5機の小型風車があり、風を町おこしの柱にした「風車村」を開設している。

立川町(人口7700人)は庄内平野の東南部に位置し、月山山麓と最上川河畔に開けた山間丘陵地の町。山岳と海洋の影響を受け、4〜10月は「清川ダシ」と呼ばれる東南東の強風が、冬は北西の季節風で「地吹雪」が発生する。この悪風を逆手にとって、町おこしに利用しようと、昭和55年から3基の小型風車を導入したが、発電は良好だが、小型のため強風時には利用できず、効率アップが課題となった。そのため科学技術庁の委託を受け96年に直径8㍍、出力1キロワットの風車を2基設置。同機は機械的トラブルが多く実用化には至らなかったが、町民のアイデアから風をキーワードにした「風車村」構想が生まれた。

アメリカ製のジャンボなシンボル風車を中心に、風を体験・学習できるウインドーム立川、天体観測や体験農園ができる立川自然実習室などがある。また、風のサーカス、風の学校等のイベントも開催し、風の町として知名度を高めている。

ライトアップしている立川町の風車。

葉たばこ農家に挑戦しませんか

青森県南郷村

南郷村（人口約7000人）は青森県の東南に位置し、水産・工業都市八戸市に隣接している。（八戸市まで車で20分）。

住宅開発も進んでおり、現在八戸自動車道インターチェンジの東側に定住促進住宅「なんごうグリーンタウン」を分譲中で、一次、二次は完売し、三次分譲は平成11年に予定している。1区画150坪の土地が500万円前後で購入できるため、菜園づくりも楽しめると人気がある。

南郷村は日本有数の葉たばこの産地。葉たばこは契約栽培なので価格が安定している。6月から8月下旬の収穫期には朝夕2回畑へ出て一枚一枚葉を束ねて、ビニールハウスや乾燥施設で仕上げていく作業で、夏の暑い時期だけに大変だが、この収穫期以外は比較的のんびりできる。最初から自立するのではなく、葉たばこ農家に見習いにいくのがおすすめ。耕作組合やJ丁も指導に当たっている。

南郷村は毎年ジャズフェスティバルを開催、国内外の一流プレイヤーが来村、6000人の観客が全国からやって来ることでも有名だ。

南郷村企画振興課☎0178（82）2111

清流と温泉の里で宅地分譲中

新潟県関川村

関川村は新潟県の北東約60キロメートル、山形県境に位置する。周辺を飯豊連峰、朝日連峰、櫛形山脈に囲まれ、中央を荒川がゆったり流れる。荒川に沿うように温泉地が点在、高瀬、鷲の巣、雲母、湯沢温泉などの越後関川温泉郷を形成している。最近新たに5つ目の温泉も発掘され、関川桂の関温泉「ゆーむ」として一般に開放されている。

豪雪地帯だが、それだけに山水の美しさは格別で、スキー、登山、釣り、山菜取りなどが満喫できる。

村では現在宅地分譲を行っており、32区画を造成、分譲中。1区画平均110坪で坪7万円前後。分譲する下関地区は駅から徒歩約5分、村役場や診療所、小中学校へも5～6分の便利な場所にある。日本海へも車で30分。関川を新しい故郷にしたい人を募集中。関川村企画振興課☎0254（64）1441

東京を「卒業」して山口県へ

山口県が朝日新聞に「東京卒業」というメッセージ広告を出して3年。最近は気負いなく自分らしく暮らしたいとUターン、Iターンする人が増えた。山口県は多彩な自然、多様な地域を持ち、農林漁業、観光地としても知られる。

愛知県で航空機の組立会社で多忙な生活をしていた前田さん（45）は奥さんの希望もあって福栄村に移住、「促成なす農業」の第一号になった。家賃1万2500円で町営住宅に住み、なすの有機栽培に取り組んでいる。

秋吉台で知られる秋芳町には早くから陶芸家や石工・彫刻家などが住んでいるが、6年前に町では国際交流の館を開設し、世界各国から30人のアーチストが訪れ、滞在しながら芸術活動を行ってきた。今年夏には秋吉台芸術村もオープンする。町では4月から34区画の宅地分譲を予定している。

秋芳町土地開発公社☎08376（2）0331

船方農場

健康増進に役立ち、いい友人も出来た

●シルバー人材センター調査

高齢者が収入のためだけでなく仕事を通じて社会参加し、健康で、地域や各層の同世代の人々と交流することをめざして設立されたシルバー人材センター。主な市町村には開設されており、国の助成をうけているものだけで全国に750団体、会員40万人にのぼっている。

全国シルバー人材センター事業協会が46センターで60～74歳の男女会員4300人を対象に実施した調査によれば、「入会した理由」のトップは「体や健康によいと思った」（74％）で、次いで「経験や能力を生かしたかった」（46％）、「家計を補うため」（31％）となっている。

では実際に会員になってどうだったかは、「健康の増進に役立った」が「そう思う」「ややそう思う」をあわせて79％、同様に「生活に張り合いができた」（77％）、「新しい友人や話し相手が増えた」（70％）と肯定的に評価している一方で、「新しい技術や技能が得られた」については40％と少ない。

会員は一年間に平均101・5日仕事をしており、配分金（報酬）を50～74万円受け取っている。

仕事は、一番多いのが「清掃」（23％）、「ビル・マンション・会館などの管理」「宛名書き」「植木の手入れ」「家事手伝い」「駐車場の管理」となっている。

何歳までセンターで働きたいかの質問には、41％の人が「健康が続く限りいつまでも」と答えている。

伊豆地方は首都圏の高齢者が最も移住を希望する土地だが、伊東市のシルバー人材センターには首都圏から移住した人が80人入会し、市内の清掃や植栽などの仕事をしている。

「マンションなどでぶらぶらしているよりも体を使うので健康によく、地域の人達とも知り合いになれて、街に親しみが深まった」と、移住者達は語っている。

山口県といえば阿東町の船方農場が、農業をめざす若者たちに人気があり、牛の飼育やハム等の加工に従事する女性の姿が注目されている。「おいしい風、豊かな時間、ふるさとの命をあなたに」という坂本場長の21世紀農業構想では、山林の育成、農家の高齢者が作った野菜にも付加価値をもたせる等、地域の人達がさまざまなかたちで参加することをめざしている。農業に関心のある人、尋ねてみては。

☎08395（6）0552

・山口県への問い合わせは☎0839（33）3267山口県定住相談コーナーへ。

＊ここで紹介する宅地分譲は定住促進のもので、中高年を含めて一般を対象にしています。

「移住者講座」を開いて交流の場を
南伊豆町　グループ「オアシス」

伊豆地方は中高年者にとって人気のある場所だが、町村による宅地分譲は行われておらず、いくつかの地元の不動産会社が斡旋している他、大手が別荘地等を販売している。別荘入居者と地元の人達との交流は必ずしも良好とはいえず、高齢世帯の移住は歓迎されない傾向にある。

その一つの例として、南伊豆町下賀茂温泉郷にある温泉付マンションには東京から移住した高齢者が30世帯ほど暮らしているが、地域の清掃活動や行事にも殆ど参加せず、住民との交流も少ない。といって町としては病気等の万一に備えてホームヘルパーを派遣する必要もあり、対応に苦慮している。

そんな中で吉祥地区にすむ陶芸家達が、伊豆を愛する人々の憩いと語らいの場にと「オアシス」という会をつくり、最近増えている〈南伊豆で暮らしたい〉という人達のための「移住講座」を準備している。

主催の黒田透さんは祖父が住んでいたこの地に東京より移り住み陶芸をしている人で、奥さんも陶芸家。海辺の暮らしをテーマにアイランド・ブルーなどの陶芸作品を主力にした「渚窯ギャラリー」を経営している。陶芸体験教室なども開いており、尋ねてきた人達から伊豆に住みたいという相談も受けるようになった。

現在観光業はあまりふるわず、吉祥地区もイチゴ狩り、竹の子狩りシーズンを除いては観光客は少なく、若い人は皆出ていきたがる。ほたるが生息する美しい川辺があり、日本有数の星の観察場所としても知られる地区だけに、もっと住民が増えて活力が出てきてほしいと黒田さんは思っている。

とはいっても、移住者にとっては住宅、仕事、若い家族には子供たちの学校等の問題もあるので、まずは地元の人たちと焚き火でもかこんで交流を深めていこうというもの。次回の会合は3月末に南伊豆国民休暇村で開催が予定されている。

問い合わせは「渚窯ギャラリー」☎0558（62）2849へ。

阿武隈台地に50世帯が移住
福島県都路村

農業をする原田さん夫妻

都路村は福島県東部を南北に走る阿武隈山系の中央部にあり、人口約3500人。村の70%が山林という過疎の村だが、都会の人に静かな人気を呼んでいる。

村では空き家や休耕田を貸し出す新規就農事業等に早くから取り組み、一方で、村の委託を受けたかたちで㈲都路林産開発が宅地分譲やログハウスの建設等をおこない、「田舎暮らしの本」等を通じて都会人にアピールしてきた。

雑木林のある丘の上、南面の日当たりのよい造成地が、坪1万円から購入できるとあって、家庭菜園を楽しみたいという中高年者やセカンドハウスで週末をという家族たちに人気がある。造成、住宅建設は原則として都路林産開発が行うが、地元の木材を使用した家が良心的価格で建設されるので2000万円程度で土地と家が入手できる。

問題は、他地域と同様に農業だけでは生計が立たず、若い人向きの就労の場が少ないこと。冬は雪は少ないが気温は低く、野良仕事は4月頃からとなる。しかし年金等で暮らし趣味で農業、川釣り（イワナのメッカ）、山歩き等を楽しむ人には好評で、首都圏からも車で2時間半から3時間の距離にあるので利用しやすい。

以前尋ねたことのある移住者3組のその後を尋ねてみた。

入村第一号の原田留作さん（61）夫妻はキウイ栽培農家として10年のキャリアをもち、農業で何とか自立できるようになっていた。冬の間は土木工事にでて副収入を得るとともに、地元の人達との交流を深める機会になっている。

埼玉県から平成3年に移住してきた貝塚海三さん（65）夫妻は、全国の山歩きをしてきて、ここの雑木林が気に入り600坪の用地を購入、家の回りで畑を作っていたが、昨年秋にご主人は病気で急死した。残された奥さんの千代子さんは「主人が気に入って暮らした家だから」と独り暮らしを決意。月一回尋ねてくる娘や孫との団欒を楽しみにしている。

「犬や猫を13匹連れて2年前に移住してきた」と語っていた松平勉さん（57）夫妻は、東京に残してきた4人の子供のことや就職先の問題があり、帰京していた。家は空き家にしてあり、いずれ再び来村し動物達とのんびり暮らしたいといっているという。

村には都会や別の地方から嫁いできた女性が意外と多く、開放的な雰囲気。都路林産開発の吉田吉一社長の村おこしの熱意や誠実な人柄にひかれて移住する人も多い。

都路林産開発☎0247（75）3333

過疎地域活性化ビデオをご利用ください！

●過疎地域活性化ビデオ第5弾
（VHSカラー30分）

［アートとの出会い］（仮題）

間もなく完成！

北海道・生田原町、壮瞥町、洞爺村、虻田町、群馬県東村（勢多郡）での芸術や文学などをモチーフとした観光地づくりを紹介します。CATV放映もしますので是非ごらんください。

第1弾「たおやかな矜持」
歴史・文化を活力に（30分）
第2弾「広がれ　ふれあいの輪」（30分）
第3弾「出会い　きらめく自然」（30分）
第4弾「ふるさと　みつけた」（29分）

編集後記

▶編集後記を書きながらも、ついついテレビのオリンピック中継に目がいってしまう。ボランティアに関わっていきたいというスピードスケートの清水選手、大学を卒業したら故郷へ帰って漁師になるというカーリングの選手もいたっけ。中高年も負けてはいられないぞという気にさせてくれる嬉しい若者たちだ。こんな若者たちが育っているのかと思うと、自分の老後も何だか楽しくなってくる。（K）

▶枚方市から西ノ島町に移住したAさんが、病気になった時を心配して反対した子供に「人間どこにいても死ぬ時は死ぬ。不安を言い出したらきりがない」と説得した話が印象的。長野県の山里ではUターンした夫婦の家に35年ぶりに雨戸が開かれ電灯がついた。「嬉しいね、今年の冬は村が暖かくなった感じだ」と近所に住む老人。取材を通じて多くの〝人生の達人〟たちに出会えたことに心から感謝したい。（A）

De POLA NO.14
［でぽら］'98春夏号

発行日／平成10年3月15日
発行所／全国過疎地域活性化連盟
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24
オカモトヤビル8階
☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

編集協力・印刷／株式会社ぎょうせい
協力／編集工房アド・エー／地域活性化センター

DePOLA［でぽら］NO.14
平成10年3月15日発行
発行／全国過疎地域活性化連盟　〒105-0001　東京都港区虎の門1-1-24　オカモトヤビル8階　☎03(3580)3070代

財団法人日本宝くじ協会

宝くじ　宝くじの収益金は、
公共事業に役立っています。

宝くじは
明日のシンデレラを
応援します。

ぴったり合えば大きな幸せがつかめるなんて、
宝くじはまるでガラスの靴みたいだね。
魔法は「きっといいことあるよ」と信じる心。
明日を夢見てがんばる人の、味方です。

●本誌は財団法人日本宝くじ協会の
助成を受けて作成されたものです。